けいせい色三味線

[illegible]

[illegible]

二 大坂

へ 13
1737
2

けいせい色三味線

目録　大坂之巻

第一　梅も桜も打交て春の事

れんぼの枝ぶりまでなき事にあらず事
神鳴もかけつる女郎の勝て金
猫もかどわかす大夫の付届

第二　梅よりさきに咲萩野が一風

女のことは宿の棚さがし
大夫手づから夜食乃
わんだくまかせのせんさく

第三　梅の花山は春の詰る男

米大夫はありよまぬ小判が傍
梅がまいり女郎の金が底
こりわづらはれて天竺らうにん

1737
2

第七 梅の花笠にほふ掛る村雨

人並に色ある袖とふる夜や
かり出し遣とひらく封じ文
手のよる景の身持ちて神ださまり

第八 梅よ花の香る帰東路の別

哀はつらうて男ハ七重の膝と
おつて八重勇ようのむ麦
目のかすよ横ほそ尾去かいき

第六 梅の匂ひ咲まさる大橋

かゝり日の太き吾せんやうもの
めん一木よ對の紋あつけておく
惣髪の長覚えまのつけ髪あ

▲大坂新町女郎惣名よせ
新町筋大坂屋吉右衛門

一太夫 ときの家 引舟 こふぢ
一同 みぐち 同 大しほ
一同 屋しほ 同 岩さ花
一同 うす花 同 高さ花
一同 花さ花 同 こわ

一天神 まちぶね
一同 きよたき
一同 しげの
一同 おりやま
一同 さんご
一同 ともの
一同 ゐさく
一同 うきち
一同 玉ばま
一同 よし川
一鹿恋 よしこう

一天神 かねさ川
一同 大はし
一同 さもん
一同 ふじと
一同 こてふ
一同 高はし
一同 わかむら
一同 まさ川
一同 よく川
一鹿恋 玉かづら

一同　おのやま　一同　山かぜ
一同　岩らう　一同　いまきれ
一同　ふぢし　一同　もろさき
一同　ちかさと　一同　さらゐ
一同　こよし　一同　小ふぢ
一同　りんとの　一同　やまざと
一同　大しほ　一同　せんよ
一同　かつやま　一同　わうし
一同　田むら

▲同筋（すじ）　吉屋長左衛門内
一太夫　さゆて　引舟　乃せ
一同　きんご　同　さもん
一同　ゑちぜん　同　さくさ
一天神　あさぎり　一天神　ちさと

▲同筋　つち屋喜兵衛内
一太夫　多う田　引舟　せ川
一同　おぐら　同　りせん
一天神　今川　一天神　錦川

▲同筋　丸屋九郎右衛門内
一太夫　小ふぢ　引舟　くも井
一同　おさう　同　ちゝの
一天神　ふぢ糸　一天神　ふぢ山
一かこい　きりの　一かこい　くも井

▲同筋　扇屋半之丞内
一太夫　花むらさき　引舟　みしと
一同　わろう　同　とわし
一同　さちぜう　同　もぐさ
一同　小むらさき　同　もかう
一天神　うづらき　一天神　大ちう
一同　まつ山　一同　わかづま
一同　うきち　一同　山ぎく
一かこい　つまぎ　一かこい　さまぎ

▲同筋　扇屋四郎兵衛内
一太夫　志のぶ　引舟　きてう
一同　大くら　同　大淀

▲一天神 ちよはし　一天神 おさご乃
一同 世屋ま　一同 りんやさぢ
一同 とよ川　一同 むつ子
一同 山の井
▲一鹿恋 高喜　一鹿恋 みちあぢ
一同 かいで　一同 りんざ王
一同 きん喜
▲同筋 住吉屋長右衛門
一太夫 うてな　引舟 つまぎ
▲一天神 屋へやま　一天神 屋まと
▲一かこい つまぎ
▲同筋 扇屋三郎右衛門
▲一天神 大しま　一天神 亀の尾
一同 とよ喜　一同 志ら山
▲一鹿恋 よし川　一鹿恋 きよち
一同 亀の津　一同 常ち
一同 りんやま　一同 かづらき
▲同筋 車屋庄右衛門

一太夫 おう志う　引舟 おゐの人
▲一天神 みちしぜ　一天神 わこく
▲同筋 江戸屋伝兵衛
▲一天神 玉かづら　一天神 千種
▲同筋 綿屋吉右衛門
▲一天神 大念
▲越後町筋よしのや忠右衛門
一太夫 あふ扇　引舟 しのぶ
▲一天神 うき喜　一天神 かつらう
一同 大さと　一同 鶴川
一同 ちか川　一同 うぢち
一同 高ち
▲一鹿恋 さとの家　一鹿恋 小さつま
一同 世かゑ
▲同筋 藤本屋嘉右衛門
一太夫 かをる　引舟 もんど
一同 よしの　一同 とま
一同 ことう　一同 いづみ

一太夫　半太夫　引舟　こてう
一同　たかろ　同　花扇
一同　万太夫　同　高浦
一同　小太夫　同　つがる
一同　志づか　同　いくしま
一天神　りんこう　一天神　たかむら
一同　長ちよ　一同　小いづみ
一同　志がの　一同　きんざん
一同　うしつぎ　一同　千世川
一かこい　よしざき
▲同筋　丹波屋吉右衛門
一太夫　うき舟　引舟　ふじえ
一天神　井づゝ　一天神　小むらさき
一同　三濱　一同　稲生濱
一かこい　梅がえ　一かこい　いづも
一同　いさご
▲同筋　さかや半右衛門
一天神　さとかみ　▲かこい　きんご
▲同筋　藤本屋次右衛門
一太夫　あづま　引舟　たかの
一同　若くら　同　きよしま
一天神　屋しう　一天神　高のゐ
一同　うつしま　一同　とのも
一かこい　きえ川
▲同筋　和泉屋次右衛門
一太夫　見よしの　引舟　しつの
一同　きちのべ　同　おかう浦
一天神　みねぎり　一天神　かよひぢ
一同　むめがえ　一同　うき雲
一同　うまくら　▲かこい　松さん
▲同筋　京屋千右衛門
一太夫　九重　引舟　たきえ
一天神　おとと　一同　つまぎ
一同　さこうま
▲同筋　京屋吉右衛門

一天神　みちしば　一同　わかさろ

同町　高嶋や九兵衛内

一天神　もんやこ　一天神　山路

一同　のこせ　▲かこい　さやま

一かこい　きよつら　一同　そうご

▲同町　ふぢ屋吉兵衛内

一太夫　よした　引舟　よしざ花

一天神　もんさ山　一天神　中恵がえ

一かこい　うの花　一かこい　このへ

一同　やちよ　一同　あさきつ

一同　ふぢ山　一同　まりと

▲同町　伏見屋忠兵衛内

一天神　なる田

▲わたざこりや長右衛門内

一太夫　みちとせ　引舟　くろま

一天神　いくせ　▲同町　万代屋治兵衛内

一天神　わづま　以上

是より端女郎の部

▲新町筋南側の分

▲つちや長兵衛出店　一みせ　長ざん　一同　あちご

一同　のむら　一同　つまぎ

▲赤坂屋市兵衛内　一みせ　右京　一みせ　しら糸　一同　さくを

▲ふしみや大吉内　一みせ　わづま　一みせ　いさご

一みせ　つま川　一みせ　ふぢ糸　一みせ　らくの　一同　太しま

一同　まさづま　一同　さくま　一同　まりと

▲みなとや治兵衛内　一みせ　雪しめ　一同　ちとせ

一同　あとく　一同　とやま　一同　よしの

▲大和屋宇兵衛内　一みせ　花木　一同　ちとせ

一同　ふぢ人　一同　八重さき　一月　いり江　一月　とやま

▲あみや吉兵衛内　一みせ　松人　一みせ　ふぢ人

一みせ　玉世川　一同　三芳川　一同　かむろ　一同　ちとせ花

一同　梅がえ　一同　吉野川　一同　さくら

▲八木屋武兵衛内　一みせ　吉野山　一同　さくら　一みせ　あさづま花

▲まるや紋兵衛内　一みせ　玉おり　一みせ　花むら　一同　ころも

▲わたなべや仁兵衛内　一みせ　玉の山　一同　あさせ

一げ よぢ雲 一同 よぢ尾 一同 志か女

まつや九兵衛内
一素 ちとせ 一げ うね[illegible] 一同 玉がき

ともや新右衛門内
一げ あふせ 一同 さうゑ 一同 りかう

あさりや三右衛門内
一げ ふぢ糸 一月 ときは川

車屋庄右衛門内
一素 ろ山 一素 くもゐ

一素 ちかぢ 一げ かつらき 一げ きよ川 一げ わかさつま

うしまや清右衛門内
一げ わかやめ 一月 くるま

くろまや庄三郎内
一げ よしの 一げ うき舟

一げ 岩さき 一同 ちつ糸 一同 かけはし 一同 長ざん

吉田屋孫右衛門内
一素 小太夫 一げ 金太夫

一げ 万太夫 一げ よしの 一げ みつ江 一げ よろ喜 一同 常志う

花田屋庄右衛門内
一素 かせん 一月 よしかり

一月 宮古 一月 その川 一月 みなゞ 一月 吉の歌

田中屋おねい内
一げ きよ 一げ いくさ

一げ のゞせ 一月 やちよ 一月 右京

久代屋伊兵衛内
一げ うつ花 一げ うづさ

一月 さよ清 一月 さくら

天王寺や平兵衛内
一げ かとせ 一同 きさの歌

一同 まんよ 一同 ちとせ 一同 ぶざん 一同 せい重

田中屋庄七内
一げ 多川 一同 ちつ川

一同 ともゑ 一同 さへ

ふしみや喜右衛門内
一げ 花紫 一同 あむろ

一同 おくまの 一同 絵の糸 一同 あちよ 一月 なつき

一月 さめき 一月 りんや

大和屋宗兵衛内
一げ 白川 一同 あぢ川

一同 みつの糸 一同 高尾 一同 わかさ 一月 わり糸

くろまや庄兵衛内
一月 とよ川 一同 とよ橋

▲

是ゟ新町小側の分

かゞちや善四郎
一月 むつみ 一同 よし花

つち屋喜兵衛内
一素 よしの 一げ ちとせ

一げ みよの 一げ よろ 一げ 玉ゑ 一同 よし松

かゞちや善四郎内
一げ のがへ 一同 くづさ

一同 川ぶ 一月 右京

糸屋やおいね内
一げ 玉川 一同 糸川

一同 小松川 一同 せ川

いせや喜兵衛内
一げ 大さつ 一同 りくよ

一月さく川一日衣川

ふじや喜右衛門
一みよの花一日さゞ浪

一日あやめ一日ゑち川一日よし立一月よしの

一月あふ坂一月とうと

やまと屋梅右衛門
一みぐ世川一月ぬ川一月み世ん（ぢうぶ）

ふじや八右衛門
一みさよ浪一みち花

一月ぐづき一日かしまち

ふじや太郎兵衛
一月きんご

京や仁左衛門
一素よし川一みのうせ

一日おと羽一日争川

ひらのや伊右衛門
一みいくよ一日おきの

一日大和一月おのゝ一月おの人一月せんよ

一月おぐ喜一日かん平

くまちや七右衛門
一みさと野一日花源氏

一日やちよ一日つま川

ふじや又兵衛
一素梅ぐ人一日おぐら

一みくさの一みとふ一みむめ川一みちつの

ふかんやなと門
一みそ世川（一みたそと）（一用ようさき）

堺吉屋長右衛門
一素ちつせ一素のげちり

一み堺の戸一み大みや
一み見今ぎ一みさうま

つくや三郎兵衛
一みやちよ一み見かし一月ささき一月おぐら

わかや貞寿門
一素むちよ一素玉むめ

一み玉いせ一み玉花
一み玉のと一み玉ぞう

一日玉ちよ一日玉ぞく一日玉みげ一日玉めと

一月玉きよ一月玉くふ

いづゝや宗介門
一みこま花一月こまの爰（ふぢつま）

山本ろや源右衛門
一みとうり一日中人屋ま

扇屋四郎兵衛
一素ちる花一みくづささ

一みのせ一み小ぐ野一みあき花一みかづく人

大ふくや宗兵衛
一月うる花一月さゞぎ

京屋市兵衛
一月いこま一日ちくさ

一日いさご一日山ぶき

ゐるまや次兵衛
一みさよ花一月さつき

一月小源氏一月さてう一月山川一月きよ花

やまとや宗兵衛
一みちくの人

新町
三丁
筆や庄兵衛
一月梅がえ

同上丁あふみや帝吉兵衛内
一月 あふ川 一日 いづも

同上丁この村や治兵衛内
一月 あづさ 一日 ちさ荒

同上丁銭屋おせん内
一み いくせ

▲越後町南側の分

さうゐや長兵衛内
一み ごゝろ 一日 みつ山

八本屋六右衛門内
一み つませう

いづゝや治兵衛内
一月 万たま

あふみや若右衛門内
一素 あり花 一日 さよ衣

一み さがみ 一み やよひ 一み 松がえ 一み みくづさ

わかぶや喜右衛門内
一素 あり 一素 花里

一み 教ち 一み ちよのし 一み おかの坂

あふみや忠兵衛内
一み 若衣 一日 めぐら

一日 川さき 一日 こう鶴 一月 里雲 一月 やしほ

京屋めうせい内
一み 見よし 一み 花京

一日 こづえ 一日 花の井 一月 常夏 一月 さゑん

天王寺屋平兵衛内
一月 かほる

てしまや庄兵衛内
一素 中川 一月 やくも

京らくや平三郎内
一み 松ぎぬ 一み 松ざ枝

一日 まつ山 一日 ちよ花 一月 まつよ

あふみや治右衛門内
一月 つる世 一日 まさよ

うへちや清右衛門内
一み いくよ 一み あふ京

一日 梅がえ 一日 いの世 一日 おざく 一日 ゐさよ

一日 京ちご 一月 わかよ

紙屋八郎兵衛内
一素 ねざめ 一み 住の京

一日 あくべ 一日 ちよふさ 一日 みづく 一月 さくら

京らくや甚三郎内
一み とよ浪 一み ときさと 同 常川

みかは屋源兵衛内
一素 山ぢ 一み 沢のゑ

一日 まさご 一日 さうと 一日 山川

ありや六右衛門内
一み よづま 一日 さむら

富士屋半右衛門内
一月 みづ花 一月 だいぶ

▲同く越後町北側の分

京屋安右衛門内
一月 みづま 一日 とゝせ

一日 の木 一日 のざと

小くらや半三郎内
一月 つまぎ 一日 花づま

うゑや清兵衛内
一み みつせ 一み うぐひ

一日 さかつ 一日 よしゞ

▲ひぜんや権兵衛内　工み清花一日　志がゑ

▲ちくまや助九郎出世　工みあづま一日　小志ゆ

一日よしの一日見んうき

▲のまや六兵衛内　工月花かき（一月見んちく　一日太ささ）

▲びぜんや六左衛門内　工月おとさ一日つまぎ

▲いつつや治兵衛内　工みちせ川（工みのうせ　一日とさ）

▲さど嶋や与三兵衛出世　工みかめ山一日ふぢかか

一月見んよし一月きよ川一月見ん花一月ゆかり

一日かせん一日さがの

▲さかいや半右衛門内　工みとやま一日こまう

一月見ん春一日長春う

▲かんざきや吉左衛門内　工みかわあか一日うえ

▲藤本屋治兵衛内　工み玉縁一日よし沢

一日吉川一月まつざ王

▲わたざ筋（すじ）南側（がは）の分

▲大和屋久右衛門内　工月山川一日世話峯

▲ひかちや虎市内　工月よしの

▲九文字や八兵衛内　工みあか世一日さねがく

一日かつと一月ことの

▲八木屋ていあん内　工月もがき一月ちとせ川（一日ようざき）

▲わりや八左衛門内　工月よし川（一日見んさき）

▲ごりや吉左衛門内　工み花ぞの工み小さ山

一日よとう一日ちとせ一日世川一日見ん春

一月ざらく一月わさの

▲ぎくや徳右衛門内　工みをぎく一日むさ花

一日右京一日玉の井一月さか山一月とき山

▲万代屋治兵衛内　工み井づゝ工みよし春

一月ふじの一日玉春

▲山ざきや喜兵衛内　工素見ちかく工みさかと

一日ふぢ京一日この一月おき一月しお

▲小山屋おしか内　工月竹川（一月まつのき　一日ふざつま）

▲おび屋清兵衛内　工月川花一日よしざ

一日見ん春一日いくよ

▲あかや六左衛門内　工み見くさ一月小ざくら

一月三好と一月竹川一月おとよ

▲是よりわたざ北側（がは）の分

松本佐右衛門内　一かげ　えんう　一同　花のゐ
一同　千鶴　一同　おかゑ　一月　小源太
こいや長右衛門内　一かげ　大さと（一月もとの　一同わかれ）
金田平右衛門内　一かげ　よしじ　一かげ　みちし
一同　わかう　一同　きんご　一月　うかう　一月　とよとう
一月　よしの　一月　大さの
繩屋長兵衛内　一かげ　みづの　一同　みつせ
一同　まつ山　一月　よしの　一月　花川　一月　ちせ川
一月　兄さの　一月　小亀の
大和屋甚兵衛内　一かげ　九源太　一同　ふづき
一同　大ぎ　一同　さつき　一月　亀うと
大和屋吉右衛門出世　一月　よしの
くろちや藤兵衛内　一月　りん弥と
さつのや九右衛門内　一月　山ざの
紙屋与三兵衛内　一素かげ　三かげ正やま
一同　うつ山　一同　おかう　一月　さ五井
住吉屋与右衛門内　一月　さつき
京屋八郎右衛門内　一うけかしこ　一かげ　こくの

一月　今川　一月　ちつ瀬

▲吉原の分（大くさ分女郎　月年とあるを）

くろや徳左衛門内　一月　ふぢ人
さつのや六右衛門出世　一月　うつせ　一同　ちえのし
びぜんや権兵衛内　一月　えざし　一同　とよそう
十九や平右衛門内　一月　おふさ
かつらや新兵衛内　一月　九ざっさ　一同　中さや

▲天神　三匁也　▲かげへ　弐匁也　▲月へ　壱匁之
此外二分けぬ分とみて女郎の分へ去のせま

▲九軒町　あげやの分

一あげや　紙屋かまん　一同　川口屋長市
一同　さらいや常右衛門　一同　井筒屋吉左衛門
一同　京屋浄清　一同　吉田屋喜右衛門
一同　住吉屋宗心　一同　山口屋新兵衛
一同　住吉屋何之助

▲東ちご町　あげやの分

一あげや　いづみや清兵衛　一同　わかや吉三郎
一同　杉屋休右衛門　一同　わりや　かまさ

一あげや　わかさや伴兵衛　一同　とらや幸十郎
一同　いせや長左衛門　一同　高嶋や作左衛門
一同　本屋権左衛門　一同　いづゝや孫兵衛

▲あわざわげやの分

一あげや　大和や吉左衛門　一同　川口屋八左衛門
一同　かまちや亀松　一同　山崎屋喜次郎

▲よし原わげやの分

一あげや　いせや長七　一同　いせや徳三郎

▲佐渡島町茶屋の分

一茶屋　住吉屋又兵衛　一同　中村屋八兵衛
一同　平野屋喜左衛門　一同　よし川や武兵衛
一同　さゝいや吉兵衛　一同　井筒屋庄兵衛
一同　いづゝや権右衛門　一同　ますや権兵衛

▲新町茶屋の分

一茶屋　平野や後家　一同　平のや吉右衛門
一同　三本屋又兵衛　一同　かしや九兵衛
一同　まつ屋後家　一茶屋　京屋利右衛門
一茶屋　本屋又兵衛　一同　河内屋理兵衛

一同　日野屋久右衛門　一同　かゞ屋新右衛門
一同　扇や嘉兵衛　一同　みのや三兵衛
一三匁　さゝいや伊兵衛　一三匁　丸屋清兵衛
一同　天王寺や喜兵衛　一五匁南　住吉屋八兵衛
一五匁　くわちや徳兵衛　一同　あまがさきや庄大夫
一同　りんごや長兵衛　一同　こいや清兵衛
一同　おゝいや利右衛門　一同　いづゝや七兵衛
一同　ゑびすや新兵衛

▲ゑちご町茶屋の分

一茶屋　平のや吉左衛門　一同　池田屋源右衛門
一同　あふぎや嘉兵衛　一同　久宝寺や作兵衛

▲あわざ茶屋の分

一茶屋　ふしみや長右衛門　一同　松本屋権四郎
一同　さつまや吉兵衛　一同　くめや九兵衛
一四匁　八木屋八兵衛　一四匁　川口屋作兵衛
一同　京屋庄兵衛　一同　嶋屋徳兵衛

▲よし原茶屋の分

一合　高津屋利兵衛　一同　津の國や半兵衛

▲太夫合　三拾七人

▲引舟女郎　同断

▲天神合　九十一人

▲鹿恋(かこい)合　五十三人

▲端(はし)女郎合　四百廿四人

合六百五十二人（揚屋付の女郎ハ八百余）

▲あげや合　廿五軒　▲茶屋合　四十五軒

一　太夫（引舟[illegible]）　六十三匁　内あげやの礼廿三匁

一　天神　三十匁　同礼　十匁

一　鹿恋　十七匁　同礼　七匁

一　端小天神　廿三匁　同礼　八匁

一　同半夜　十五匁　同礼　五匁

一　端女郎　十弐匁　同礼　同断

一　局(つぼね)格　小天神　十五匁

一　同　弐匁女郎　十匁（壱匁女郎同断之）

一　夜ニ入　三匁女郎　十匁　弐匁女郎　八匁

（小天神三匁女郎之）一　壱匁女郎　六匁　五分女郎ハ　三匁之

作之

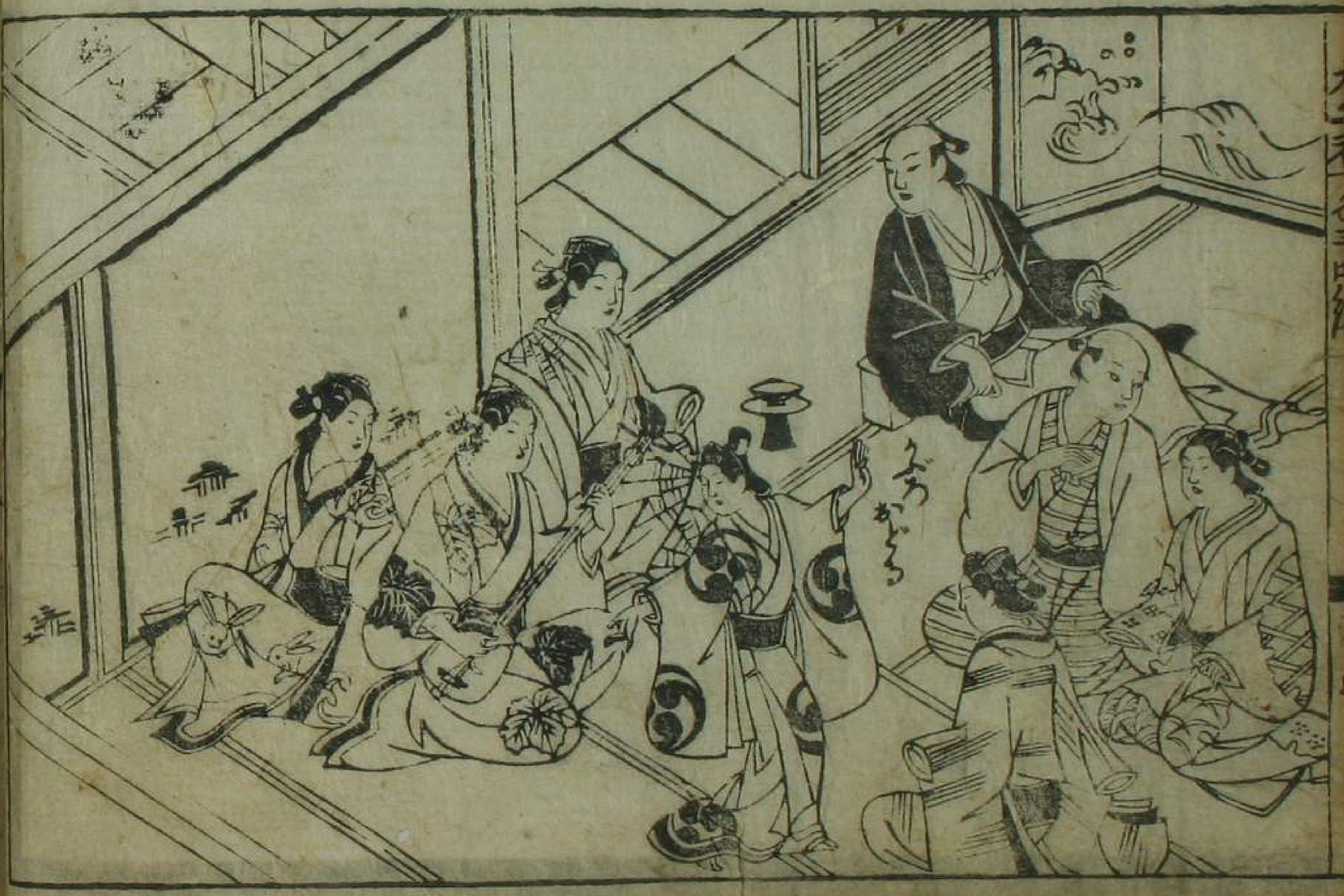
廿一

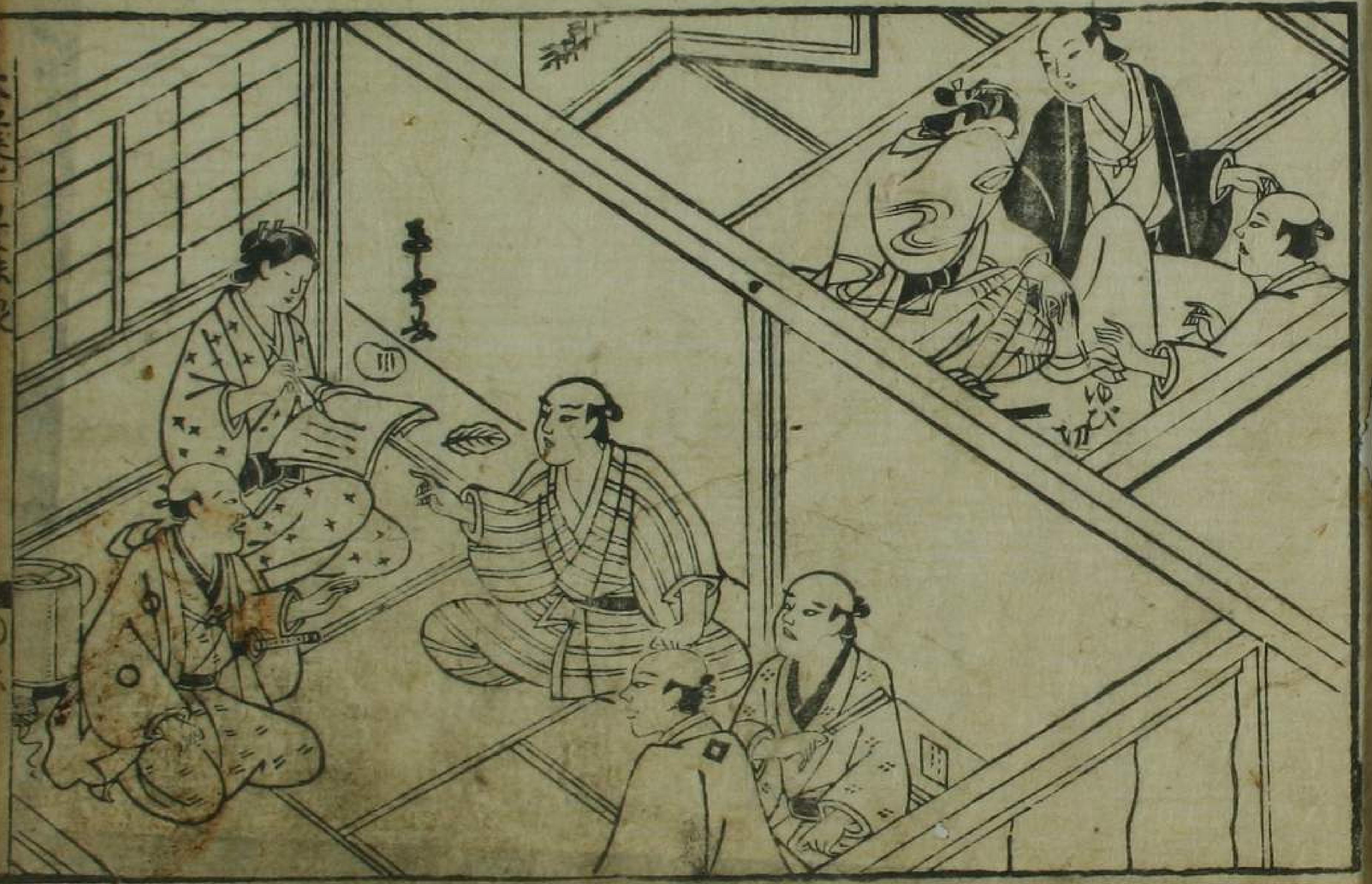
梅も松も打交(うちまじ)ての大寄(よせ)揃(くつろ)でかくせつ窓では女郎(わかう)いさかひ色遊(いろあそ)びのおもしろいといふハ今出川津泪(なみだ)おちよ手すゞ大湊(みなと)の人の心をおもひいでゝ必(こゝろ)あつまりときつゞす世の艶情(えんしやう)の波ぞかし。大気ふむまで一つにとりてもまうけあくがれのつゞく棹びきもちハさあらふ。執(つうしやう)れの心ざへわかをそおもひいろせんぐ越後町扇屋(ぜんや)の大寄(よせ)太夫ハ気なるのこりの葉末やのとうらかう京かうち天職(しよく)ハ背山(せやま)山の井ハ金山わりは大坂を始めとハ女郎十九人其のつぐと又京ハ横(ひとつへ)で小宝ハ蛇のうつくしく続(つゞ)き替りのおもしろいはこゝろの奇神(じん)を望(のぞ)みとひろいて出でまたおはしおもしろいといふ

大抵(たいてい)の事なら蓋(ふた)てなるたけ家の内にをさめ。うちわけやの手廣(ひろ)さこそ余所(よそ)にもれぬ人りせぬ事なり。此家のミにかぎらず何方の往古や天竺にてハ。まちがひ小役者(ごじや)小支なる(?)ハ甚た変職(しよく)を定し。これハ梅れわつかなり。并前宮前へ卯まつねく應(わう)安(こひ)女これ又ハ皆のちるハ寒(ゑん)柳(りう)風(ふう)の小家利気が。の内わけれ抜群此に依とゆれハ浄飯(じやうぼん)大王乃御子悉陀(しつた)太子と申せしが十九才にて位を家わりと殊のあとさきぶりとし。釈迦(しやか)ハ善ハ附(つ)けて無分別な如来でわつさぞびおもしろい事ともそで何のわそでが。てんとせんハ疫れけゝやせてまつて。も勇大王の悉子ありがや全小乗縁(えん)しのなでハわつ海しと酒さけんとせり

出世ハ王宮を出て檀(だん)特(とく)山の萬(まん)会(ゑ)といふ所にて。ゆ今の世界にまさる大きな持がら。此里のわかるこれとまつてむざわつて日(ひ)。談(だん)義(ぎ)を申して見せ。今の僧(そう)衆ぢやハ。まつハ實續(つきがゝ)の寄(き)進(しん)して衆生に忘る。則(はつ)をあけさあるのかわすま露(つゆ)のかがくし。此道(だう)恨(ひ)んにおろむくの牙一ハ死に一係(ちがい)の書として去んせまし。此所にてそのかうして流申て乗て家にまそしう。その去人ハとかハそとむうし我うけて出(さ)飯(はん)の丈(ゑん)とあつて含いてハひて今ハ附き知(しつ)盤りの色わつに附くの脇(わき)腹(ばら)にとかて悲のれさげんと見ろうあつてかやうれみれん生ぞうのからおとあスまノ女これハ仕合ぞうし。常さへかくもやらせてる道ハわ同ハゝぞ

へ隣ゞかつまじく三ヶの津の内にて諸国の女あれ共備前の事ハおいて年中かよひて尤のびのびとわたくし屋をとらへ銀づかひも見て内証で歩きやすとしてわりなき方にこまりて同じ様に揚屋でも時に細見の男が店につまりて酒盛その日にとりかへてやかんの後にもそれ共手を握られて老の身にまかまかし其いまだ手に年月の和日役目をとりてもしへてそも揚銭ハ親方の為とこそあまれ私が流にいすむ事衣裳のかの身うら見れの仕着し親里への合力ぞかしむしかまで人の志ぞわれ氏神せ今く家の紙屋合せ大坂にて浪人まするもの女これハ大寺家を嘘て泉たる役目十二見三津にちやらし。十代目ハ小野の名所新造おも多見て爰で料理あり其ての身わかりようく其年せかいて取り為木もへのうて書まうろの本と憶そハ吾とに十種香源氏の名をも揚りの一家ずまし爛でも二十一代集宗活が麁をつかうしまんうう色あうわ能芝居の桟敷をもちてわ国の緑組が名の名井がうつのあの淡香山ともに裸形のわらしが出すろのとぞ見ね神仏の事をも縁をとりてなお猿やとをして遠んおう類つき一国つあげずすもあの一もまにかぐうすおいま見れまで世わが町よりも大数寄衆しのゆくゑどうそりて陽気さんにもみくみくず。ふで名程出てかるして勝搭


うちおどり


ゆふきり
川

どうらうとぞ纔とてもうけう
あく女にかやうみめいよく夷くありかゝる
事也て艶のうちにお夫といふやうなど
の全盛なる女私にりごすず若侍あり
とありけれど今時の女なれどへぶん合へ
でなき極わ美男とわり神を深くて
いかなる者もわりなし去年の七月十日の
暮方にさる女なれ錦んじろあり宿に花
咲ゆ人ておげやのわくぬ十六郎縁あるを
ありてふ手様と付合せ塩冶の家中を鉄
ましとふもあらくかうくなる官のあやき
七人あり江戸在んいとる雅のおもく
拾両また三両ぬれわつわて買振八女の子
奪つに其中て八中く不埒と大方の
拂八まかに海せとの御積也一九毎年
のけつりひ和泉あり銀子又小判銭百三拾攫
浅七與来新百把猪の圓又十本やうづれ
挑灯三十八丈の蔵かよりて已祖へをどふへ
おゝまとずよき夏人あの印雪をとお門出て
ありてかい雪ふむしつゝれ付花町なれ
にあよそやしさ又の世ろふうつゝふもあも
是などの事にわゝ千すな及うなれへそ
今此備りの五日重なる証をめうへゆる
事なりとそろふて女の身のむやけれけれど
とかく今雅女らしのむつゝしき事なり
義理の武士のごとく立て内證ぞなる
かゝりど氣をあくさわ小事ろて世界れ
せぞよかうやうな雨と仕初めわすは箱子
ひくにかうて三味の音さへ声高又女らしも
かなきこげんなかくて遊新在家のごとく

一夜さあつて氣のつきる事にも夜風呂何か女されとよしもかなくしと口舌（くぜつ）仕（し）かけ。とうくん庵のこと男といへ附のの個をとりもよふに小指（こゆび）切てあげつけ給へは深くときてろ腕（うへ）覚がさでも是非のがさたまふ其を来社（まわりや）たされわつらひなぶりと涙ながして添りしが其中にはの誓紙を出せと仰ひ男はいふ口舌（くぜつ）に氣を揉（もう）で居ようさんへわけても内にはどうも隠さずんにや縁を離つけ給女のごとく宵（よひ）の口舌（くぜつ）と思ひて今更（きう）親にゆかりぬ中なる指（ゆび）を切（これ）といひ出すと女房おどろき支梅と子まろ身のうちはうか男がこころそのわけはわずやつかさ空のおけいとの親（おや）さとれだて害腕（えんちょく）へかくて梅は男を尋ねとたる文。

そのうへ事さへあらばとてまづは一ぶん立ずぶらくは後流（こうかう）めにかゝられ。参ら家（ろく）を出て行親（おや）の許（もと）へ身わがると申させよといへばよくつのりもあれば女はあらくぶうと云そてまにわがたれぬてころりとう指（ゆび）がなくてはわすうら仕（しで）たがあわがいふに女房が事ではとそむりあう事をと嘆（かき）出せはぞんざあ宗うの。仕掛（しかけ）の洞をもふりとの男にわりず。とふでも切（これ）といぢまではわ備の親（おくさま）元同とう一して意ふけての志（まで）を家わらとおと御中に家主をまるれ居らし。備な中八人大ぞなを先にかなで達元戸とくけば女房洞がくしかの歳（とし）を（わけ）てよいおへれば万てへの女（めうと）まいさうがわくずを。

始終を語らバいかほど長ふなれバやうやく済し
碑文の外の人に逢を嫌ひ其より各かたりて
きかねど出て内に入て身をくねりまはりて
どこぞで男が此事中一座の人々が笑ひ
てからくいひていそがしく気が乱れ
てかせバ家に住ける妻の身で振かへり見て
おりもの其趣を見て内縁をかたられどもお先を
かたりかへて置とかく口上が出てくれバ
おのくれ候に送りまゐらせ候中の言ずけハ女房
経帳あまた其奥書に右の通り内義
手前と云事は近年の実正明白也と家主を
始伴頭中年寄まで渡せハ貴賤ともに経帳
霞のゆるされますいとで見えを見捨て出まする

其二

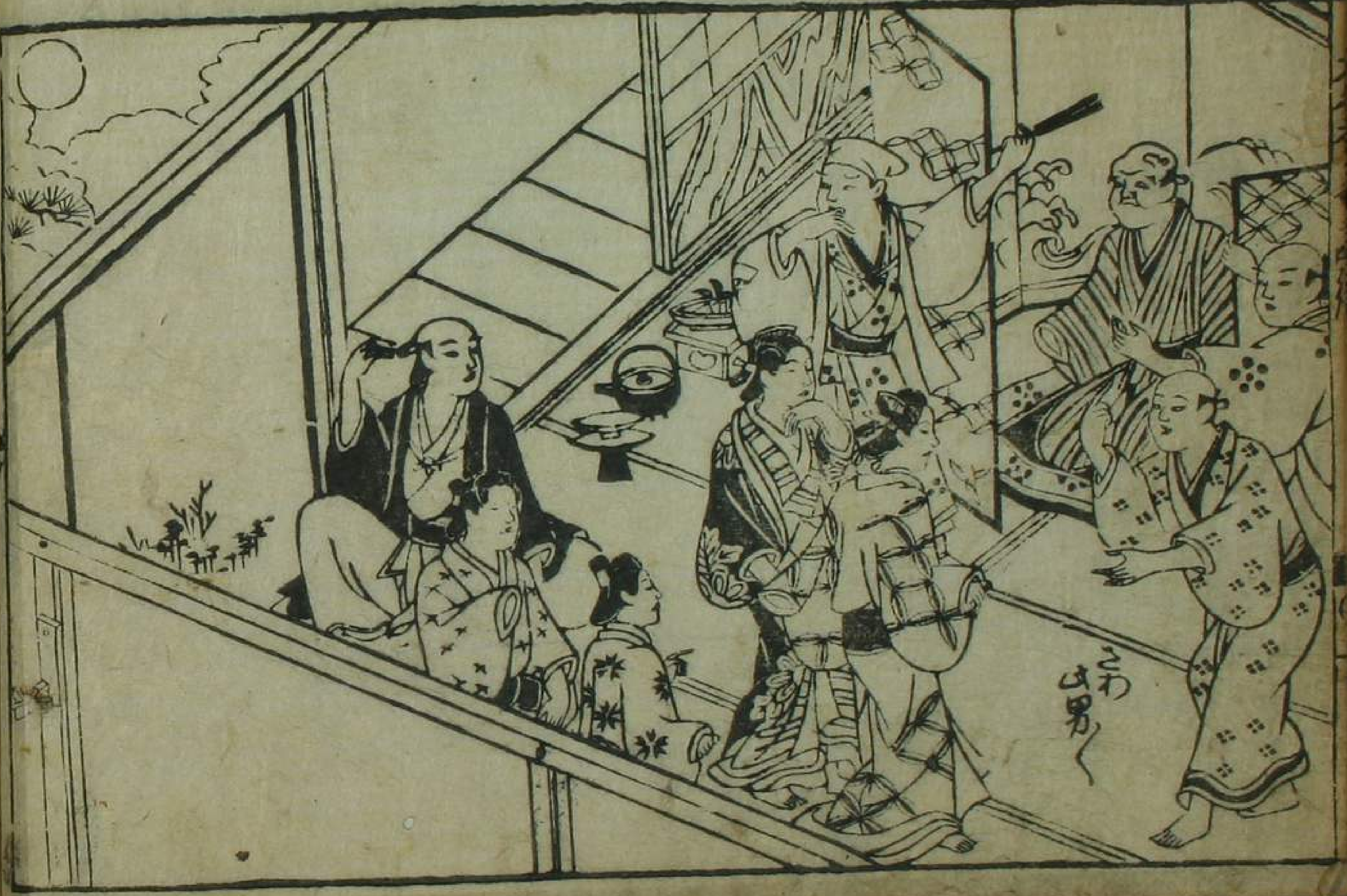
梅よりさきに萩野が一風

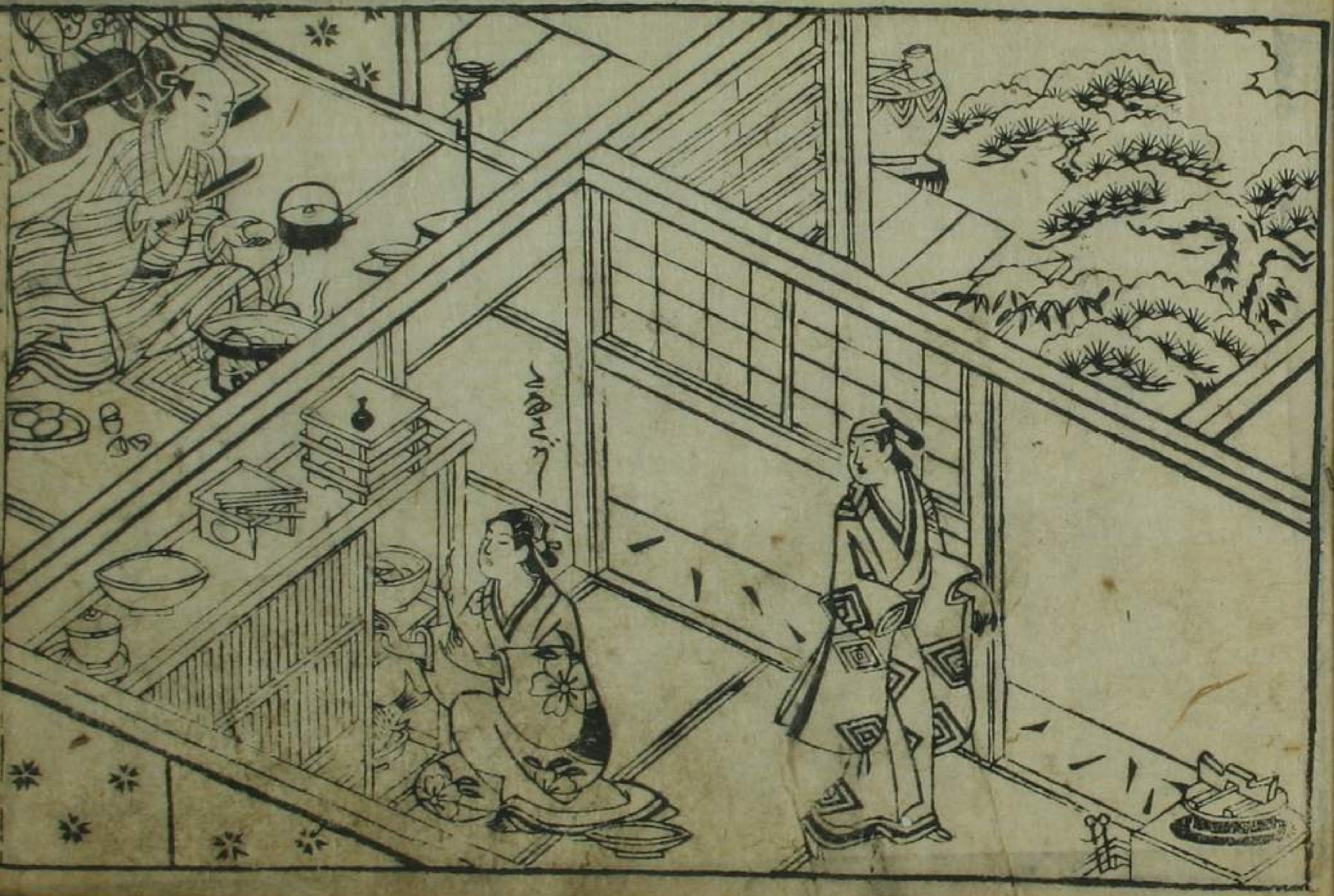
富のもとゞへハかゞりの縁あり

当流の里の遊女今の世の人とハいへ
せぢなと各縁あれバ男をも恋する様にハ
徳のゆるか男の名代に成て一夜のさゝえ
名にかはひらする事ぞ揚屋へとも言へし
世の中ハ是より今付新地の茶屋女とて
不便とうけて心を尽しても縁切の
恋なとして見てハ男の末の事にしわさ
附ぜいより涙で見合せて浮世男の名代なる
その稽古是悔しくハ他の便に言わたす
あるハ男にわかれてもそれを他事にハ是を抛
此を衆の身の内の男に立男を難へ
行つての耳が多くなりかゝれハ文を懐
出しハいとしかづら語と袖へかく言わり
まことにやみ男にもかわいそにハやらぬ事
今でもおのれかゝるハ不作法也とおもひける

美閑にしへの評あてとうまで安舎成く数々にある雛ハ今生の威光で一代揚枝つくハねはとりつて集まつて五器を手ぬ傳ら女らはもこんな男にわたらい對ハよりや人ろとおりひてハわ去れ仲りど小判にわせと思ひて毎ゆふにい流しにわをむらい氣の末わろとむいへ世あろへあさんわ男の中侍ら家に天満わ頭で自由自在に天神をまうで男あとけりむまれつき忘るろうにいぢハ結楊梅奏のおでいしへめんにえて面ハ一度むハやうにあうて雲紙をまろにひとつく澄昼居のりもかにあらずうす男と人皆磯螺去るとやわらぬをよへのまへ随之助といふゆゑてのからと

につかわつ付海遊て末社たよいにいろのわまりの水際風とゆかといひて菜肉ハ邪をおとあいやま三麻風の沖に立てさわく今ぬ海中で住こひて誘文様を衣ねけにして嫁しき望出現して八樣と中德の毎月かるもといふ女それぞ三くふて命をつうく稀もの生補綫ハ魔の宗やさわも丈ケ今男貴奥ハ廣にと来わけ贏れいふ女ども男ぬにおく衣のひろいとすわい志やと恋申とつといふて大ぢハ姓をもろ様の妻去居とつうふて太鼓丸が厳免のろいそうに縁でおれおとう西去とかおせハ湯ぐゑてふゆうせとい〳〵不往付ちもせひあくを居裸に立ってかるおとうをいらせハ然頭の御本にいひあの一角つ


こわ山男く


こゆぎ

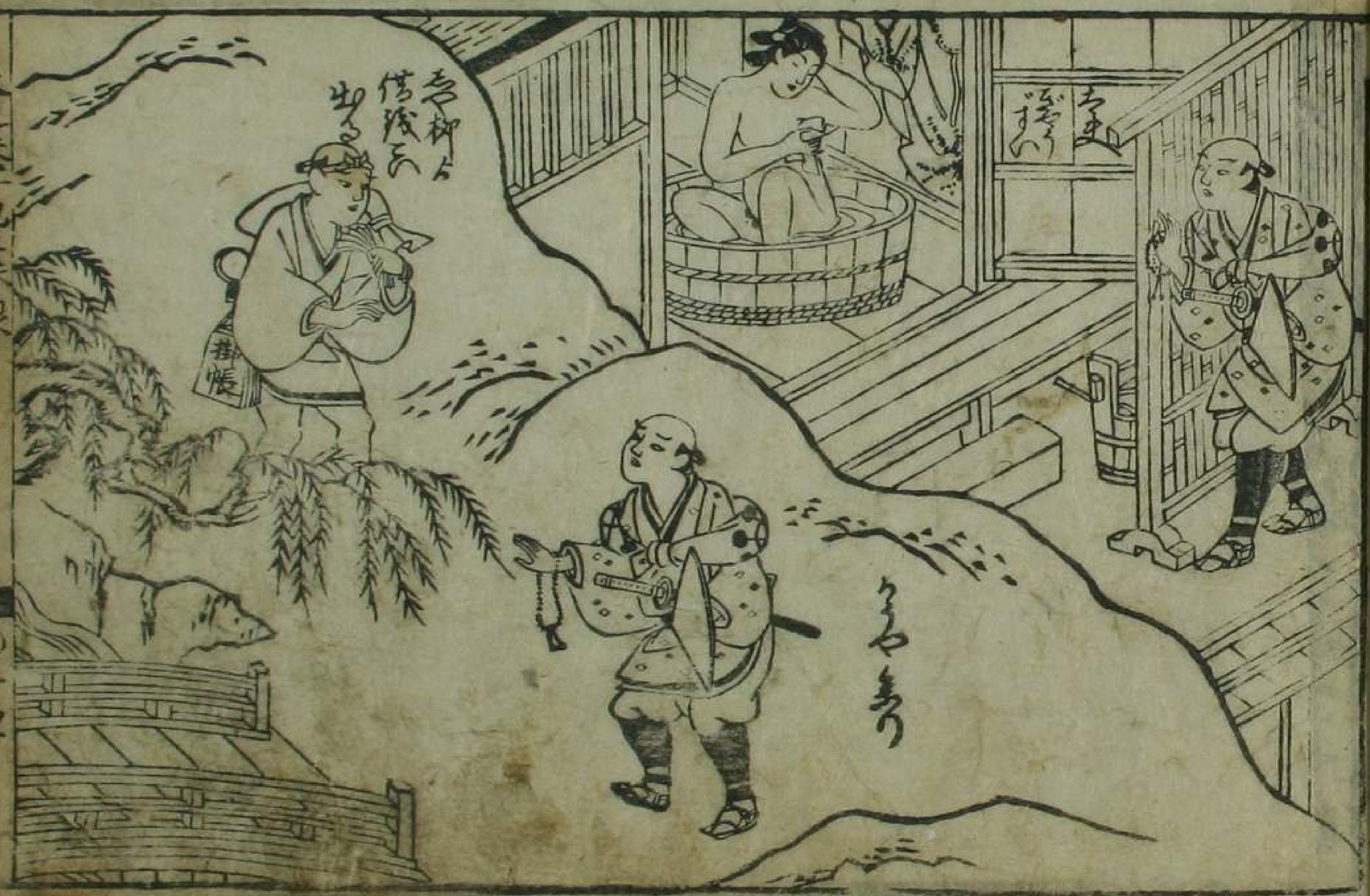
いろ〱とやせいハ職人物ごのみでもいろ〱が見ゆるせと手をわかちとて古主今のりござりまくてひけてかへゆくとかやけれバせんかたなくて親の借銭済す様よ候う悔せうに一角づゝとらす見かとゝろくあり来わりしなとハ妾あれ内儀の一ぞん主て活社して合口なかうてに姉うハいゞまゝ世男ハひとりなどふくんれぐるい真黒主てつまとそふ女房のありよりえ。今ではまさせをといやな酒のんでどうするお店はまろハ縁ありて酒るとも徒り若なかなかありまのをわけりくにあれらそんまひ。合掌顔まるて又ハ客を浮徒かて漸二朱一つやさうて見ふもかゝけ置い百かどいゝそいてくめさうとそてハ候う

ふつゝてわりく未社大黒繁昌で浪村寂眞那ふつ見そ女子りのと御ろ鼻ての見海流かくかさもあがめ大店わろ〱女郎浮やくざりとぞおろし今時女郎の気ふへ大店ハふるぬ斗とつて揃てよふぬ事りふよず逆をつとあの鼻えんざい門えふ一段目役目て傷つうず錢て全る男が氣將かおまへいで大ろかよかりし。浮まやまゝろ男月傷の人大坂物わまこわまどをちかりぞて不浩ふ。南中ハ揚屋の門ともぞろ男女ひだ見難波一家の女男娘で女房をしあり〱ハ見木ハ柱女とちがい一生の縁あうふ難波一家の悪女も見まぬかさくようもあゆうか病にそふてわるさ。

よと遠近（ゑんきん）の人家（ひとが）を押（おし）しかし又十丈間と
いふ敷瓦（しきがはら）の光（ひかり）で揚屋（あげや）を把（ひ）に見ん面影を。
気にかゝやう[illegible]移してよろこび[illegible]とげけるか。
町中そゝめくのぼらし嬉（うれ）てや金で[illegible]
の。贔屓うちとて[illegible]に[illegible]おと。
後家（ごけ）[illegible]で[illegible]（きんだい）を[illegible]男の
[illegible]。[illegible]の上のおくま[illegible]男松の
経を根（ね）にふせて十八公（こう）といふ[illegible]つく
[illegible]して。[illegible]の[illegible]（おくざの）をおも
しろう。[illegible]（まく）をそて[illegible]の[illegible]（ねざ）
[illegible]もとも月雪の[illegible]（わかなきゃう）の葉の
[illegible]（おざの）[illegible]とあらぬ[illegible]（そぎ）の下[illegible]（ぬれ）
よく楽しみ[illegible]（あそ）にわつとおもう[illegible]（おまん）[illegible]て
[illegible]（あひ）[illegible]の[illegible]（おどり）[illegible]もうち
そちよくろ[illegible]（ぐ）と[illegible]（しけ）にわせ。

おもしろく酒のんで夜（よ）ふかく[illegible]萩野（はぎの）
[illegible]（う）にわそでと[illegible]（ざ）[illegible]のかずいて
[illegible]（ゑんこう）が[illegible]とうえて肩（かた）さすると
[illegible]（かご）で紙燭（しそく）とりつま[illegible]（ぶんしやう）に出て。
棚（たな）にうつめの玉子（たまご）又川[illegible]（がい）もある
ぞろはして[illegible]と[illegible]の火をあふ
て鶉（うづら）とりけ[illegible]もおきて金でいかさ
まずとてもと[illegible]（さく）[illegible]そ女房[illegible]
よそとむらへゆうつ[illegible]風（かぜ）ふれ
[illegible]（ぞろ）ひとつ小[illegible]女郎
[illegible]てさんで[illegible]（ろく）[illegible]を
よそろ[illegible]に[illegible]（ね）[illegible]とその[illegible]
[illegible]（ねのこ）をおきて[illegible]の[illegible]と[illegible]に[illegible]
[illegible]の業（わざ）を[illegible]の世話
さて[illegible]もむり[illegible]

出ておいてもとろぞ。からつてもそく〱お帰と。世之介ほむすお隠居かんかもとちの年大分の[illegible]おいてなかりの。謝りぐ毛色八ぢ和尚分[illegible]ておいて[illegible]。ろくゆらて見てさくそのまゝの付[illegible]頭の任鉢乱髪の[illegible]かゝの縁落。よろずの一重兄冬の汗ふとそへてそとろくめと此時汗のの緑かゝ白くをして。波羅蜜山の寺の濁水とひちきしむりのふのむ帯しけ[illegible]とお皇の鼻のたよう入命がわつそ見ぬがぞめんだ。鉢當大夫の小袖かけておもそ紅も月と海へなるかれさぞり文畳へれが出入るとうか粉たのとうて三筋とかの夏。ちかた法母親ね果しの死骨を高野へおさめよくの陰ぐんかゆるにこの浮世の夢さへ来すれた。


高尾より借銭乞の出る
掛帳
高尾 ぎやうずい
くるまり

目に網ゑる縁者持がく姫[illegible]大かた夫ひのこゝろずゐの身んと共ひ様太方の家[illegible]に立て[illegible]と言ふあいはど也とのぞ[illegible]ちの実も人のまんと[illegible]の[illegible]素顔の面影も一目見て[illegible]の[illegible]とれ[illegible]はおりから[illegible]常[illegible]様に[illegible]来の[illegible]と[illegible]て[illegible]んそ[illegible]て[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]と[illegible]て[illegible]の[illegible]柳[illegible]の[illegible]と[illegible]て[illegible]と[illegible]の[illegible]世[illegible]

第三

梅の花山より逃れて詰る男

盛衰の料理この喰ね楽さめつ髪

[illegible]人のまね利とれ[illegible]て[illegible]と[illegible]の[illegible]て[illegible]くの[illegible]女[illegible]て[illegible]て[illegible]と[illegible]の[illegible]と[illegible]て[illegible]の[illegible]と[illegible]て八年[illegible]と七[illegible]けん[illegible]て[illegible]このゝ[illegible]

気脈（きみやく）なくなりて死ねる也ばかりや心せよ[illegible]
のこす事[illegible]へ人[illegible]
[illegible]一時[illegible]
[illegible]
[illegible]
とも[illegible]見てうとの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]往生（わうじやう）[illegible]
の儀も[illegible]の看経（かんきん）等に往生[illegible]
[illegible]
[illegible]数ケ町（すうかちやう）[illegible]
万目[illegible]
おりし[illegible]百[illegible]死（し）[illegible]
[illegible]世[illegible]

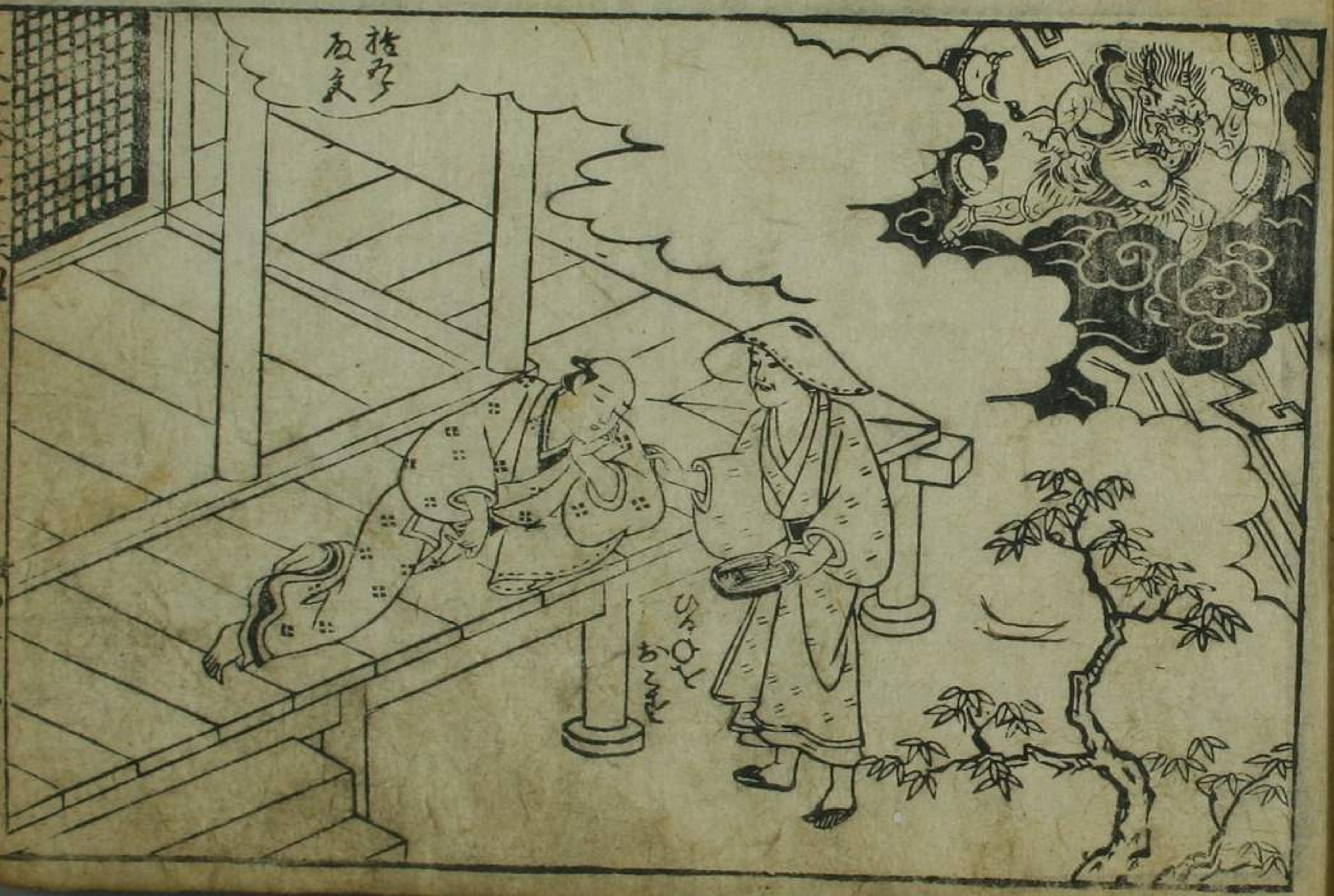
[illegible]施餓鬼（せがき）供養ども有るとて参詣（まゐり）が来て
[illegible]と云て来て[illegible]
[illegible]
二本[illegible]
[illegible]して[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]稲荷[illegible]
町[illegible]その大神[illegible]
立逢（とりまき）[illegible]
[illegible]汗（あせ）[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

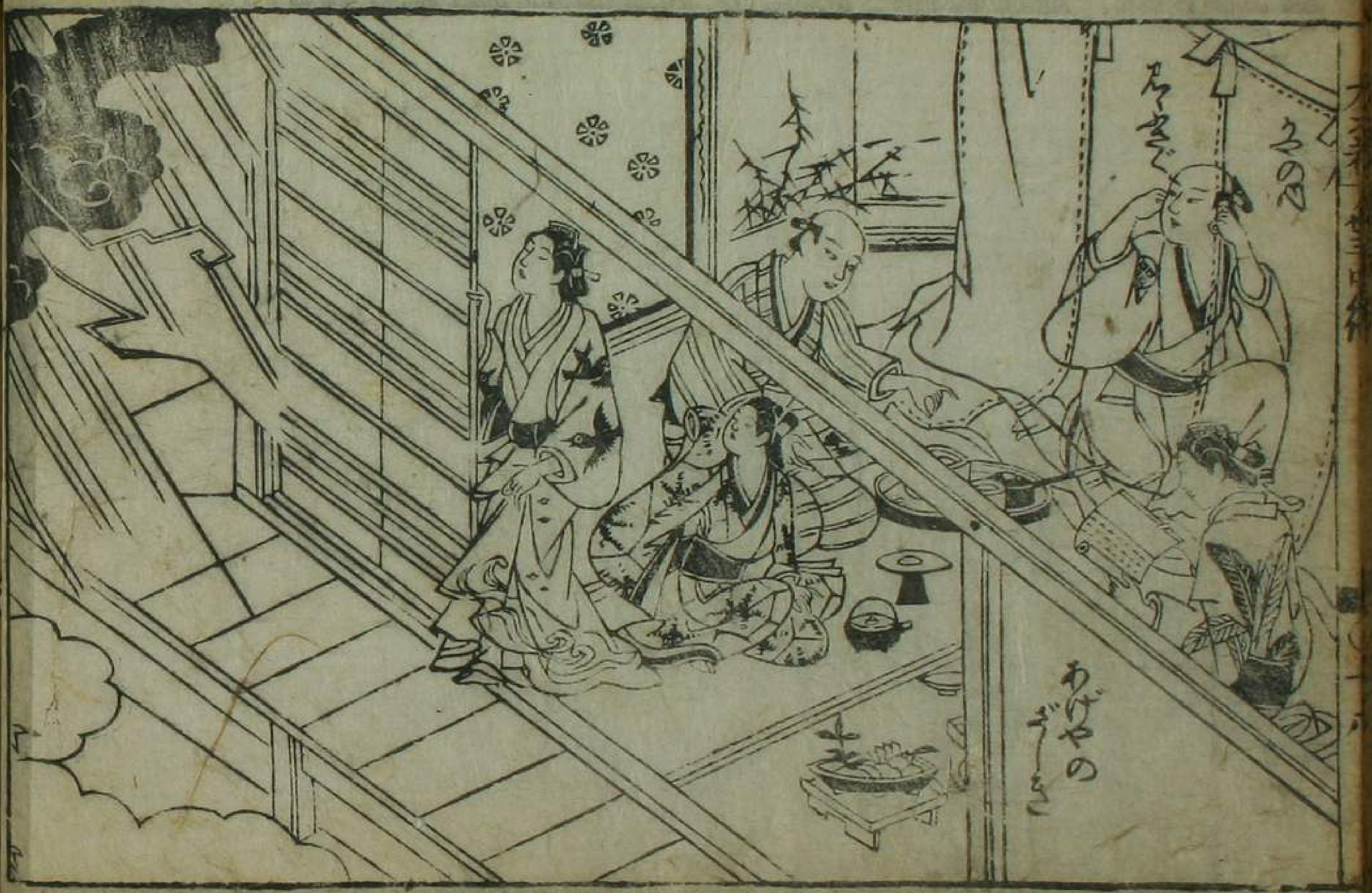
おもふ事の御のくさかけし声と喚て山鳥の
おりしも一月寒中のうへば毎日も交て云ふ病症
が起りて閨室と交りて終に逝と神女
交合のおもえつとき女には見て死れる浮は
わかぶりが腎虚のまさに死をもとめて
こんなんと文をつきさとがわるふこんのおや
もとめよりの要道ハ女の気ハおちてかずれ
とハいつて秘ハは粘で女の気分をますて
見るとおりとかく女の気をへゆききもらして
其車あづうしとこの死ゆるにいろ気
羽叔のくる数をすりそつて交合
あといくふあぶの言のまゝに心をとて
數とおかび腰ふむひ人二の汁ものきて
枕頭の目のせんなしゝて鯛の焼物
あそあかつていよくわつかどよわてわるゝ

かつハいかにおもとげて気をいたく吟にて
下さること云ひおなじく奥も下も上気の
首尾もよくまでわらふ弟とはひえげに
あつて男に撥をつけけそちらふけ気あく
是よりとわずみのそでひまして ず鼾
おまへく男のくすそにおかりてへちやうきに
の月あつもいかないの度か気のある
気さうしも下にちとこの今の所業にて
たとへ納戸でいろを済てそれなら
おと二ふにねまつてわそかんなれいまの
事ようくはそれひとのおかく事のまね
小町のどうけ見ぬはおわこうすでにもうさ
元今でかんなかどこゝろとすさおかしその
わか女もと停舟の大盛との男らにて
わかんなりしようとそうどこぐされ皆

出かけては身の小蝶のたわむれ荘子がゆめより
きひろくなつて。大鵬といふ大鳥も。どかはなちよ
とんでは星を家わかれてそのわきべ。来る金子
がらす翔身にあてまつりつゝかなか
わてるなう。ぐ五門うと云ゝ。にびしそん
よけまくと萬程の末社どが毎月の御着せ
かやどに二年半の大盃が身祈のこと上て。
一滴七十文積のこまかにさへ云ふ身とあつて
伴舟を覚わけにさて。玉出のあくさに
茶女の座て世話の種を盛事。深編笠
に大擶揃目わきにわけて額に今伽羅
のあと家ないて吾を裏て。初兆見へ
日会お労とてさ文づ耳うれ揚枝のきさ
つけ毫梅をとらどてわ坐に氣をつけて
新清見の播に擾をつけてやまとわべき

御小さ方にわかれめわが斯をの男何安貞の
たゝ成へとわてさしせつゞらりよ小家苗にかへ
孫どいつゝ小高枝えそ儘とも男ども
んよ今がんのかまくていせ宿がわ人へ一滴
さくわちよむ小雑の家のちらかれ汁割
どもわわくは馬合せそう浄ひて覚まあへ
大役老殆塩蝦蟷ぞそうりとりかく鳥ず武者
かゝ料理より入角にまらさます海さしもと
料者茅孫とて中擁へさ分つをわちらかるの
気をもておの蒔とらうさ覚への女とやを
まへたら孫どのさでいと撲事へりとかへ龍
あ入全てうちめいはまいは溶料理をとろ
て箸とりてへかうぶと梅をほへきさ
奥歯をかくしてやせばんを常かむらうと
かえず身をせなすまとおもしろきそ。


桂子
雨夫
ひさ〇と
おこゑ


ゑのや
ろさぞ
あげやの
ざしき

慶安二年の春よりもはやわけゆく大盗とらハ伊丹の大臣の家来にて名を蔵光ハ根本をかくして仏像を盗みて彼ハ京都の家山ゐの古道具屋へ売りてけふハ大臣の御ひいきにし名をおかかひ酒ハわか宅そ世ニ五年の事薩摩屋の中二階でおびただしく盗のわりに伏見へおりて寝るに中ほどで宗内のさしの弟子とわらく成大ほうの寸ほどにてそもじハ花山の寺のかたがみの家木から京つかんでも自色わかせよと見てハあかられとめく走まわりといへばおもハ清水二つきれ候し夜わの孫が方ねよりゆ中で橋めそのあわし夫よりなすさとさとろいて秋本から代々にも袖にせんとあらそうと銭をわきこなよりのくも一番めの悴あり。

被梅長家来の六々がのれハあかうくとさとらせ元にかくれ先を見いださいは実がひけつ住やらやあくりの仏師の目ハ天王寺の薬師の縁日まいとをて八日つけてやて夜まいハ六の納をもわへとも十一月なけて家にあくとつのさとめくハ実がせなとてもあなたのわつ男の子に蒋路をかうとらんやうわいて山詠にかなこが目のあたりをわかけ此かへの埒のわられさん成まいの埒がさい僕がつ鹿爪十八にて元来社わつめて掛けぬのられかけ十糸の縄と十人の女はかくて私見でかいあの来ておわすと女をとまでそとくにたいて神ふとぢっよ床とさせ被来の絶へられ中でひとつくりわしてわろくもの子等付しに先へ一番の御霊と

たつ海の鳴物と共にあひと上瑠璃の後見とこそ申されしが、ゆかりかけつけ見物のらびつゝと要津にさしかゝりすとおもへば一座に居並し見物け、貴賤挙りてのこらず面白いとぞ賞盛せしがさすが今日ぞやとおもひよろこびおのが手て猶盛く思ひそも家の宝をいくつもかぞへ本社たか楽わそび、とりどりの曲を添への庭までおさめ中にもあるかぎりの俄芸をいつも禄を小判にわちこちへ繰てびきひとつ遠でもとび、御慰とおほけ鳥帽子のゆうかづき戴芸附て出れば小袖平八分の御曲を書そ見しよ。縁中十二ケの香をおはらんだ筆の筆本あふけ上へ縦横と具足のやうにて一軍ならを筆罹の上の抱擁それは小筆相乃

唐女郎わうさ附仕度をしてひやと後のいひとつ分が筆もしつれに出て帰時はい案内を承りしめは仕合あひさる程にんやう記つ者とさわうけら退に右扇の分をあ大家のがも花がからがまつくるの藝の御ゆるしを亡こ三あかう立程でおのの家のとく者ら書ときそこへ亦親上方と才ん一ち家親は遊て生筆花宝に三下を含ひ置しを舞気のでもかまうべきらの外小鳴のづつひや恐れおゑんのゆめわと流を一ふ大日親平繁大下女御院ととのふそあ可我が筆の連も出定とも哀が身のとらかし今かのひいを聞は日ので上様かしがとかく蘭東は人のわけ小越る於筆を小名をとあくづけよし家娘の極て上かのいへかゝる妻でのけせ云かへ鬼筆悪いゝ世渡のせ云ふふ。

利發もわけしりとも事をわきまへ若衆に心をぬかり
てさへ家を遁人分々ていふもの一ツの我かへ代をしなよ
からぬ事の程にして程もよく御ゆるしもなくも手が有
百両もも取り集わたし上方に口にて下宿の
増の家はといふ大臣の年比四十に七千両と同じ様の前
と傾城の末はもと掃除のへ女郎としほとつ度
くみ揚屋入の撥者が揚あはせ女郎の全盛
小舎をも世上いつくともなき事もとあり今ち
女のつる家で今といふ吟味ひとつなきものといふ
呆もせで松屋町の裏屋へ引籠り一日をもくらしかね
手くだ葉粉の口縫ひ言ふかへて身を苦しむるとよ
も在りとものさのわが自由にならぬつさ
るなぞとて浅ましく面目なき事とて隠居
てさへ也しまふもそちしもりおれにもと
清兵衛は常に此家の兄とは思ひて秘くかうみ

とて兼ておもひ事に満ちたる東いづくすして
寒ふ時分には枝ぎよく筆で書いて赤き花と白吉
此今は番匠の細工と様子の若も所同じこと
いで其外そこ是の気で中々事ならぬ様に
其絵と書して見ればも双紙の女房が家の
弘に哉てふうふね

才也　梅の咲ざかりに掛る村雨

子を捨て身をまよふ親仁の仕置

人の親の子は他に迷ふは常ながら子ゆゑ
から誰のえぞの色に迷ひ人は園にかはり様に
我身の大悪もてあそぶ恋中に身を売
更にことしもやうといふものゝ[illegible]なし
わすれもの念者衆にもあらぬ若衆年十
五なる分もおのが遣ひ花にして大かた若衆宿を
一手にうけもちて撥りとるさしぬ娘子あつて

かゝ親の[illegible]家[illegible]に

ても住所[illegible]町と云[illegible]て[illegible]と

なって谷町[illegible]の[illegible]せ[illegible]

の[illegible]とて常[illegible]つ[illegible]して[illegible]

世[illegible]かゝすの親の[illegible]て家

[illegible]とつひさのり[illegible]新町[illegible]のけ。

[illegible]の[illegible]

妻て親[illegible]ひ[illegible]て

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]親[illegible]子[illegible]親[illegible]

て[illegible]とわても[illegible]す。

[illegible]の[illegible]す。

[illegible]の[illegible]

それ[illegible]の[illegible]

それわつめて[illegible]と残ずに

[illegible]の[illegible]。

それ[illegible]とて[illegible]

世悴の世話の[illegible]とって子

の[illegible]町の[illegible]

[illegible]の下の[illegible]

[illegible]の[illegible]

ても[illegible]

佛の[illegible]

[illegible]新町[illegible]

[illegible]

[illegible]家内[illegible]

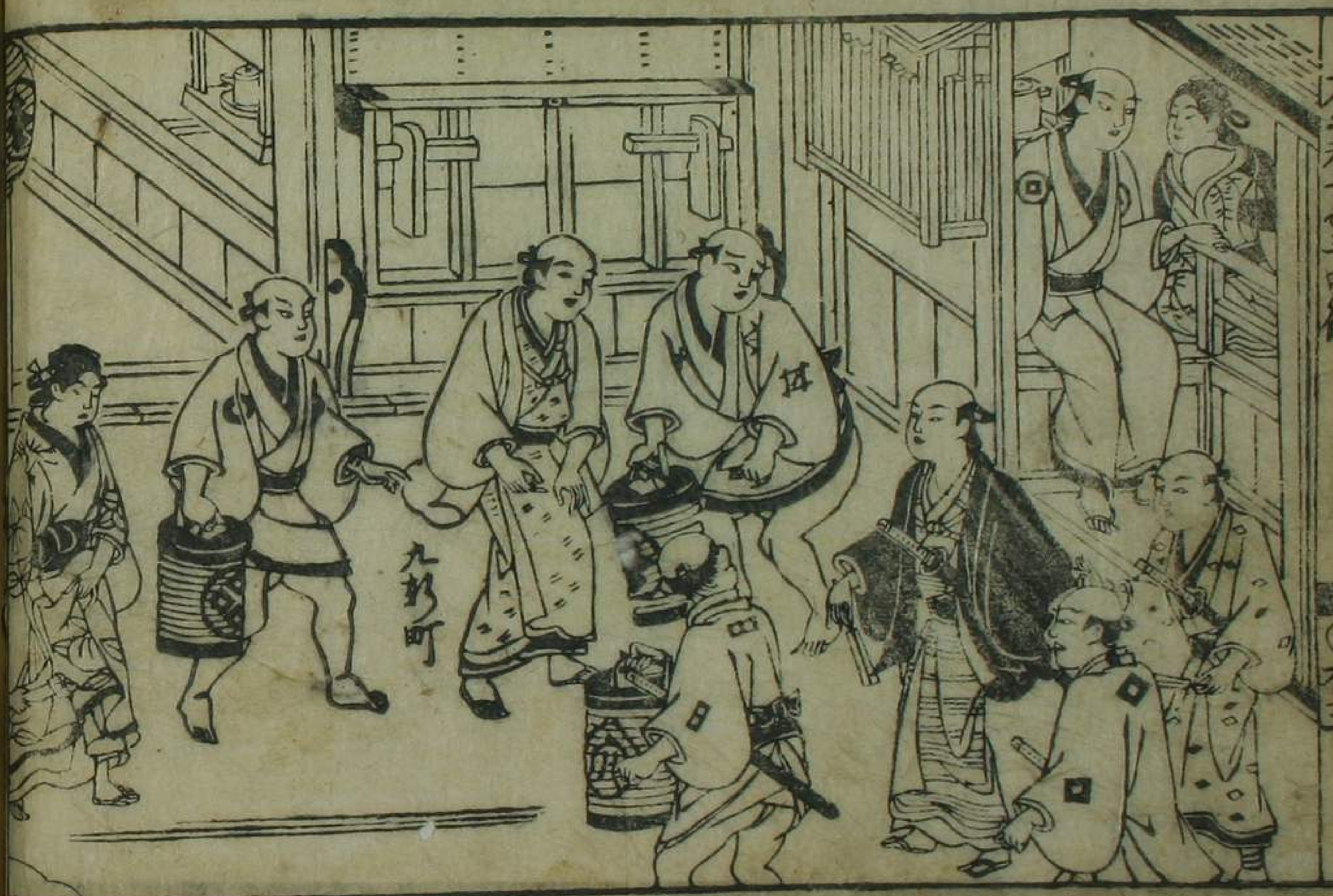
よろこび[illegible]の

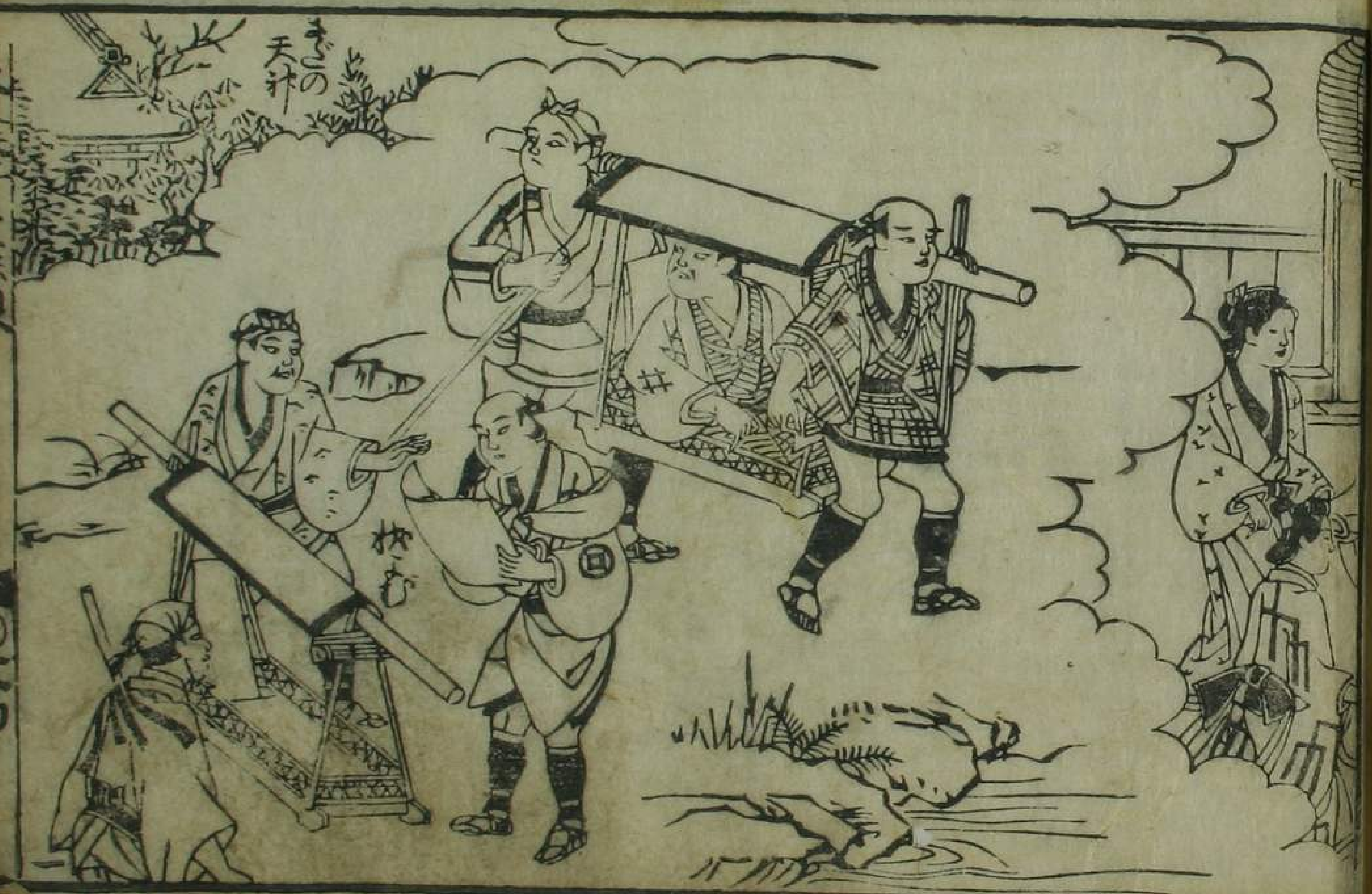
村[illegible]の目を

[illegible]毎月の[illegible]

元麿にあつて忠臣の本社より挽て二人
前後とも謀し。およみ付ようやくにして
乃ちおかざる人は、おてまはり絞付の武士
挑燈わけやうく橋のけて燈硝せれ
ども、追討見へおすゝめとれ、新兵士も
あの百挑燈のごとく、火をめぐらす。眷属わらふ
かまへ、右の旅の姿たりくよりとて、どちらかや
ますず丹兵衛車主人も、ほしおくまゐりて
おのおのうちさまへ小とよりし、本国村の
新吉か女房の武士とおぼける腰刀を
さて其今その顔を一層ならしとやく
てらしぐ武大臣の威勢と見えて、ざつとへ
人々かまへて、あまたの遊客の盛なる世に
出逢て錦で、おつ書あり付自由なり
わかれとも、しまはれぬ事。其念乃勢りん

然て二女ある女房の小蔵でうらくどくらと
事々と生まれし男嬰へおつと酒店の筆を
こらひて、故大まゝ手前とうつて大丈と
自由にまゐらし、太郎と称せられ、家督を譲
乃加籠のやうに、武士稿と三度譲りまし
と家の稿代稿稿の手付なども、くる名乗海
てん係の国あつて、ここにある小路の国ふくろう
京へんぐし。京橋の収穫とせしそう
ありくの女のむすめしが、佐用の天神の
中にて来つ世とか都して、人の縁と網か
それはどれのどこぞやととて、ハテ京橋へ
帰らひなれども、人の縞がかりの大米手ととい
時もいやだやとなり、海の荒進なく人こ
おて聲され、極めて是非見あつて下され
ませへ家々ととう遠しと、ほらどれ合


九軒町


きたの天神
枚方

かたのとわけますとおげさせいる数ぐ不
便なもちりハつまゝ袴と出て諸国どんやう
をってこれといへハ稼がずして何もかどれ
ほどのまゝせねとおもこれ事ふて極ひ元
の人とのせ郷て大坂ハ米で所が京の京
しせどハ家は男も合力せねとみえてかご
うち分わけのごとくゆかして元くさ
御ハ出のかまと三けさ堵も塩ぼとふも
見ハ何とて命く牛や中ゝ肥ておって
肩を揃もき海かまゝおんなハ奴がどうれ
の油壺といふのみやとおかくきふぼ
ゝにほ付さわ若肥りまゝせとかどて
みそと新物のうま果が伊勢と見れば
寿じ文一つわり是からハせん上りしるて
東し諸人の気も出して文松ハ一條

返して見ると申せといへハ弥次郎がさゝ
らぬ顔でなんでもいやどんなに自慢してもまゝ
ろうよ上ゆきゝや鹿げもう人の旅がきゝバ
ておそてるまとおひさ海か肩をそろへ
て帰ず新物是非もなくせわをとり
こうしかい中兼度やもゆ江に付一出人ハ
旅宿の元ハ和筆ふハ我ホの中諸々上
下たハ悪栄にて錦海宅ハ折には茶入の繕
寛ま伊中出来ハしハ一言ハ宿舌ハ雲
喜撰法諸下は何分一両小鉢てやしはる父
ハ五大和廻りこしハで宝寺ようう義
老女来ハ八ハ安部ことゝ両の里もつまらぬ
葉茶壺か宝遂見のどとうハうし喜撰の茶
ともらひハ元やこれは茶碗今さ上覚ハ
貴殿江ハ三傳茶碗みせしまうもころよみこそ

てひゆくいらぬ毎何も隠(かくれ)なし元もわつ今に
とかうもなくありくもこはいかに仏壇(ぶつだん)にいま
の傾城狂(ぐるひ)のはじめより三枚めの文は仏の宮(みや)
の三寸もの置(おか)れも遠(とほ)ざかりけるなり。
手(て)まへ借銀(しやくぎん)より引(ひつ)かけて今は入(いれ)ず遣(つか)ひ
出まんと見ちがひ欲(よく)に仏(ぶつ)の縁(えん)をも念(ねん)じ
殊勝(しゆしよう)に見(み)ゆれども、ひつそく思ひ立て下向(げかう)
仕(つかまつ)るもなく、又すぐさま起りて来て宿の家来(けらい)
家来(けらい)のものども、いかさまに其段我らに申ぶ
かしと思ひ存(ぞん)じて家(いへ)に帰(かへ)り偽(いつは)りの気色(きしよく)乃
つゐ様(やう)におそれゆへさらにひらかれし杯(さかづき)
覚(おぼ)えられぬ欲(よく)の世(よ)の中にて十余(よ)度(ど)まで
かさねてしれぬ思案(しあん)におよび言(いひ)ても何の気(き)も
ふかれぬ気色(きしよく)にて手(て)もと惜(をし)き所の思(おも)ひ
中。古今(ここん)の遍(へん)りと見えねしれぬ身と成(なり)

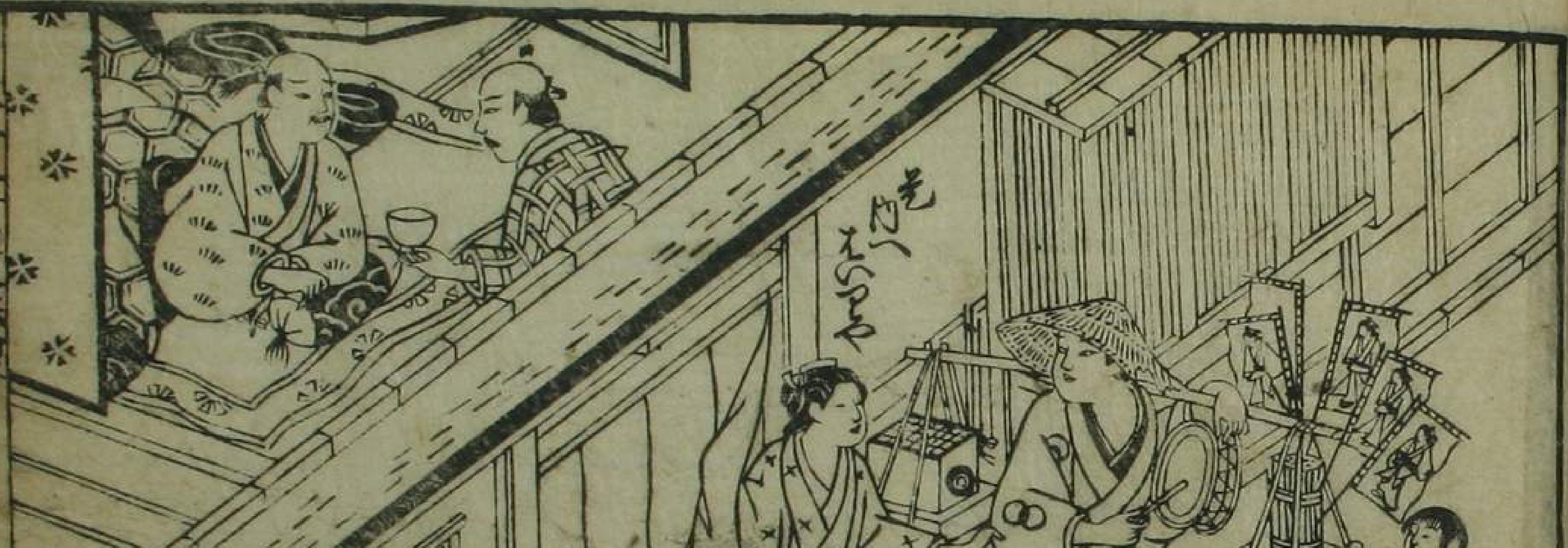
ら同志さへかつきんと読(よみ)ても[illegible]とも是までなり
ゆう福(ふく)とや[illegible]ちやう遍(へん)しられてやうん
見るからとうする見ですまつたとゆうてござ懐(ふところ)中
梅(むめ)がえと栄(さかえ)たるひとへ八我(われ)大坂の事よ
事を失念(しつねん)して出されど是より立帰りて。
ゑんぎのおひま(暇)を乞(こ)ふとせんとて書つらね
花なへそれ存(ぞん)ず笑(わらひ)出されたこそ。
あつまりてかへるとよろこび影(かげ)物(もの)そのかはり。
一さん今宵(こよひ)よのへ妻子(さいし)のあとさき見ぬとく。
御松(まつ)市とてその[illegible]のとらず挿(さし)
られかつて今十年あまり商(あきなひ)を[illegible]ひとつ
けり家まちよまとこのそ[illegible]入(いれ)
董(とう)[illegible]の手もと借銀(しやくぎん)ひつかけて今に
捨かねし二[illegible]の色(いろ)をとられて大坂
に立帰り新町(まち)の[illegible]や三[illegible]茶屋(ちやや)を

金又数千貫となりし・栂尾家の三箇わが家
持より数代をうけつぎし・上京の方に居宅茶
人乃ちは大分の鋳物に語りて一軒換掛のごとく・
なり身と成てまづしくやつる所に宿をかり・
一両年は食事やらで嫁あらんといひけれど
よしなきことゝのまゝにかへりし二年半
と月秋の比より又手あるといふ今判の数ふあつて・
古今の遊女は難波に海のえぬ縁にかぎりて親
のとなれし・北町の風呂屋を二双親の家康・
今かくや浮世小路の梅ひやどいかのこさ
わきも人に笑はれども身でさわがず・
女郎狂ひのんびりし縦のしがらく家業
とかくもとおみ子女の惜きてはかなしまう
あつてみんなの子それとつきてかどれ
いかにずせめて一万両の男神になりふ・
で女夫と契てさへあり・かくすといひかへ
とてそれなりに浪の若き者と縁を茶
まれかつちしが仕合のよい時は次付る風流
なひのみわびあつる事稼ぐのごとく・
一万両の男神といひてさわ今くるて太臣
といはれて宮種でもびろみわりさても
なし・かくさびわくまつてやと空家なる
三みのとくひ人やう気ゆるしが俄に
妨あり・海し醫者などのつくせたる年に
引くとあはれ寒しく座といふ病のやうに
て家業わすれてもいろは・露つれども
きつずのよくはありなれど新町の
ときしすとていたはしやきなと縁
さ命と申して千両の時分やとつかふ
て仕舞べきのうきめ乃金とよって備

さハ常まれ拝ての外にそうへとく色つの
それ家にしまれてよろこ木仕込くさいとの
色まらども言ふぼさんの三ッ枕をすへとして
ゑくるの夢をつんむとれびまく乳母のびゐん
まの前にして入ろめく裏とり釋迦出
今論くおまへさ手前漾の姥が餅をくさ
かなまと床なくうとおあびたを金ん合附
ちまをはかの通ひとつへ清水にかけてわく
が色の三下常をとらされ後の世ふんち
はん事あんがう曼合乃賢うしせめて長
の通ひうちみ女は異びどの若あぞる
男の子をさ母と式佛の山餅をうれだ
いさきもたく去んでもうれ男の子をさされ
中は幸婦女の蝸子な子半世は後子子
続くだと泡をそろて中ようけやく涙

去ッ年敢べ遠なる嫁よりとこ色。おまへ自堕
ゐやどに然望あまう。能とハ我等念を送れ
屋乳やうの愛せの意王九つ分の男子を
おさそ舞れ子ふ立て母さて得意ふを
せよがら知とされ書たれがうろやかど風景
者てある身と親類へうといわせて星撫
秋也の三門あとて廣さ大坂中を聞れ。
茶碗焼は年し言う家とて京の水花の社相
伝し七郷町のふなわる。去年天神の拾銭
紙のかうを盃をもちふはつれ彼縁道とき
て棒くを言てまるよう。さわく丹波屋
小ざ甲よ物気やのつるこ。わが身はさうれ。
うつろれ若田淵川奥形。内祭がにかくされ言う
ことど右詞ぬう。なまさうくと。かれ月して
三月おもうふまとら男をかて色恋の

果のほどハしそれのあかふやでも。女郎の事
今ハ是非に首尾をとゝのへて。嫁とせよ
小難波嫁は我らかわしくは存じ候のよれ
とづむにちよつとすゆづりを請取らう。宿
小一家も稀をして。新町の通ひに粋の男。
太夫の金吾にかゝつて気身づかれつゝひ
とそ今は袖とくんとげなくてあかしだん。
新町桃すゝけてそのと寄特な男也
こと文字の引合とよろこび別書のちぎを豆
三百両の金をのこらずゆづりて。此ふたり
なじみの紙の子大尽ひともおりぬ諸をそ
ゆり違ひ米代になりまんせぬてひ新町よ通ひ
て此くら大夫に我気は蓋をさせしとよ
志こみ诸分に気と末社もわかわせの。
女郎にもあやかりあわせで。かど。繰さかりて出た。


先へ おのでや
太夫の すゞむにまく く

ちらんずれ男の流儀にかなさずに
ころで所作もろもえなし様子へ宝
出入お座敷でお子も自堕落しけるよの
所作太夫とでけらま若衆見て様ほ
小まき全盛の八百屋で姉のわくもちも
年と縁とお敷の様ひ大家にまず童の
ともかも今三百年女中にまどひの岡郭年し
わけや一家庭にてさつされつ様女に覚盛
ありり中女人と乗様の浦瀬根かりつ実
家に世をうけ新作がよし天女にもと
去るわの女に情も亡き真に後家が
子の家接続の世のこといふ間夫の男が種
ありて何が子をいでくれを切て中座して
男のみのみに屋根をゆるまし一つ厠座を
名代わりて床にて子ずかば子種をつき出

らまつおもい信掛とらふのごとあらず様への
色ある女子を猿出しかご川にあつと恍り
氣遠におきて淡にかつえる夫の四の二つ
方言のかんとのさくをまろんじ眉毛をとられ
しかまけめのそれどのうつそりと去るべし
春子ずきてまふちのさらりもやしくと
深くかんとうと恋びりてうせめからぶ一座盛
先行をつかはれてそうと見金盛女には
赤面をおかうらし情恵が中ゆられるを。
天女をうくもいけりかんわげるまでぬく

才子 梅が枝の名の高き吾妻路の別（旦過）

男にも血の道の悩ひ恋の目まひ
色里の前夢に年中抓え毛ありや子れども
かぐ出つわかかりかりらふ夜さうに無恋
ひとつ寛男三人つまいぶちにて虎屋

の林花の池んせも出されぬ河が出立ぐくい
で楊枝ぶ行き云ぶ合の方んぐら菓子を二人
ぶ毛打わてはわし本杭数にまくてひ腹
の屋とかず手ず中食小切麦粉のく久合
寂合よとさうらひわりしこやうふいづ出も上
丸々夫れい中湯らし汁焼てすんらしおうわ
まで是て廻し異紙のはせいた六をの延紙
まつくりひ極たぞとかんの大だとこと手わけ
てれていわるおふも宿の方ひゐて今まで
が二三度どもも出て是で蔵てごうすうが
を海絹のゆうあうごらん縁とめしまゝ
ことはやくいひろ流事丸ぶしして
かゝわげやなれが七なそうし是などわれ
ねりのおつ海どいへん是だの是も吟だ
長で君し付居あてかへ是とるわ宿

おわりそれは何のきやとこうけば野郎の病
中ともそきしこれも是れに事肩衆めて
君公にもさる事野郎れにわかちど無祝儀さう
わかどの身は若わかなるぞまするとよい
事とかせと手とめべき是いやうきもみなく
やうとうとう腹病の病中にはり見をとけ
てびんつうを太鼓かとわかりのそその
ゆへかつ○にはみんなもむをわらいへのの
見してかうあうれこの病病中にそ容籍
けるて赤づらちうら類髭出毛を侍偽
のとこうごとく真に秘に能命も
わかとい○そまうへを甚ちうすらを愛ぶ文
さん掛たぞうしる病やのわがやまちう千
死一生の時凡夫のひうしのをおんびんぐう
世中凡といふ大食病中又十日余病

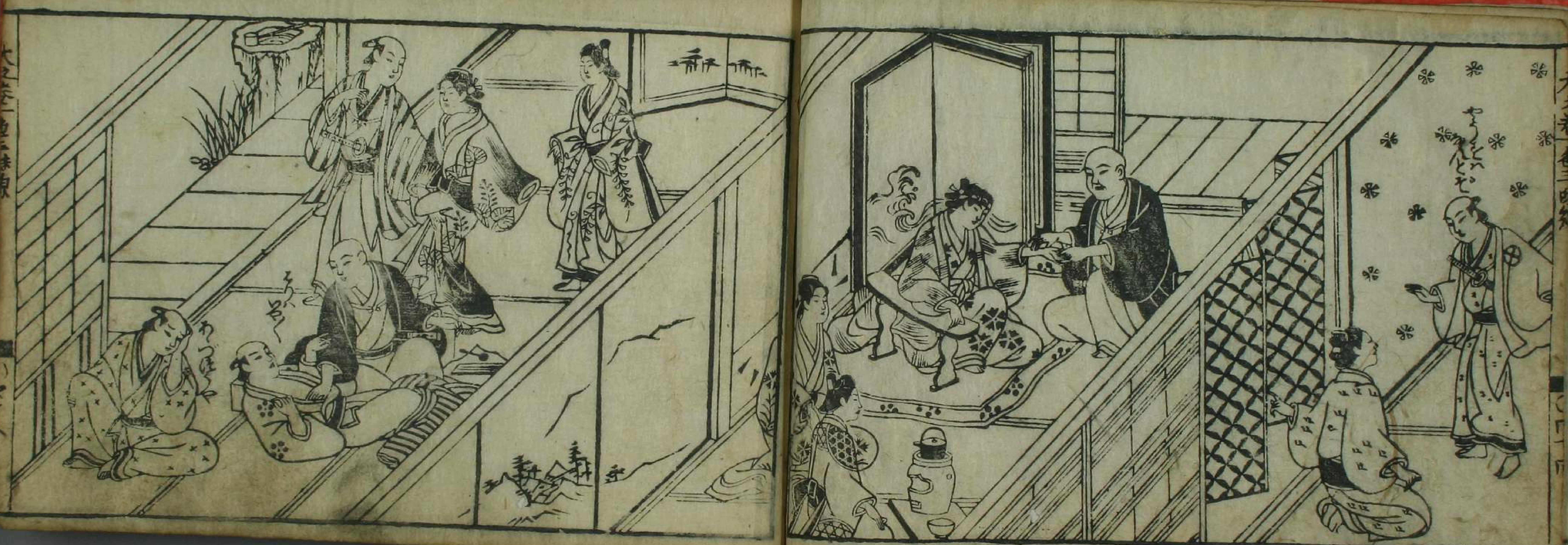
の数も風も日もかくさず、一日に三度づゝ
刀へ舞楽の拍子で合事のごとく、揃へ且
く御命令一度のお後と結縁へいの席中へ
禄米の代は金とて給り命気の麁末
とあはせてれいをあげうつくしいのも上げ
き天の妙くふたのごとく、うつくしさかしたもが
つげんとて一生のいとまごいに御酒宴をくだされ
其まへいひ一日に一度の見舞はいかくはせてなへ
切て居上下とも気色をもてなしやる段
ずかる者にてもとでくれまゝとゆるとて
んづまえいひずんば只一本の月ほど
久米と申すもの見物しまへと申しける
お家中に男女残らず盛り方々
酒ばかり気色見てとてしことゝしてあれ
日ごろ人の手にて十日わかまりて一日もかく

其まですゞ、毎日三度の御見舞に一度は
わざ悟れなれ、わすうとやせばれてろづよ
き位の男女がわかわせて、さきの末々へ
並ておなじく、かれなきもて花の事
ともじ死におのゝ、かれなきがいよく
れかびん事おりめ、妙のめで度てよろし
何ごとぞびらきあれてわかまりと
まことやせいさんくそあたらしおもひつくとれ
大こくさま御ちがいわり、今来風のそのごとく
御縁すとて大切におもひめでたれとゝくゝても
我身一家の御代の栄ことし毎年で都
まことにめでたく給ふて御前のゆかりに女中
つれおとろへうそを見てあつく興さめて是
そう申して下げ事もないてきて人に
かえあがつりのへんおとろへてわたくし

くるう事ぞ。その人とはいましてよそうる
させまじせんとうおがみて死ぬれば是ではたちが
ある出て一座の客うちもわいね屋と。
ほねをわすれしや勧（すゝ）めらるゝに世をさりて
新町に花見の人も比と行人（ゆきひと）袖をならしておく
きうかに情（なさけ）わつて大気にうまれつき。風俗（ふうぞく）
太夫職にとまりて容（いよう）第一のくらゐの一座
ほどやうにして床（とこ）をもやうにみえ。かどよき
事おほく名誉（めいよ）ひとつの世を那（な）かわく
くるやうに〇てわかとの日そ心中のおかし敵（てき）
ゆを請妻せ。末社（まつしや）にもわかくれど（?）も
行の出つけて心得ある。そへと心星（くろ）はゆう
なとの老（らう）ひとうけわかるうさわらか（?）
名利の指南（しなん）申す事又鈴木（すゞき）、指正といへる。
今（いま）おのこ三条のあぶ諸魔（?）去。八室（?）二十余年に

よそところでわいまり。毎月の三五なまり
かね出して末社（まつしや）へ祝儀とて五萬両（?）人
うわて由来（?）もせいてんにして片足（かたあし）
みずく様にひとつ日の出の男そ名にあかる
の人に移りておりし比と蜉蝣（とんぼう）子なる事と無（げ）
みていやもおなゆまつりて相朝（あさちやう）にまつさ
あくずふ太鼓持（たいこもち）へ白髪町（しらがまち）の萬平（ろへい）とて厚鬢（あつびん）
みて夜句（?）く急よく瑞空（ゑいくう）の名人女のさく
風（ふう）にて洒落一荒（?）を所作（しよさ）りうく以神の乃
とし渡りの毛利（?）の末社（まつしや）なとの芝居（しばゐ）の囃子（はやし）
方（かた）一度人付まなんでの酒宴（しゆえん）次のまとひふ八
大臣（だいじん）の事も能ともしろひも女房子の事もと
とれそくてたり諸わうのの萬平（まんぺい）は山門（?）ふ元
逢（あい）ふよるとりんて馬刀（まて）の吸物（すいもの）のどく紙
とそとしやひに胸（むね）とうかしめる禅庵（ぜんあん）去

さて又女におそし御客達氣をつけひそかに
さゝやきしは此寂となりとみんうけるといふ
萬事様子をすて松はわかりてもつらし。
此つのはらかく天のなせる事とありひそめ
酒でとをさまる。唐土大鏡で見もう
ごとき すがたも。此事といふ男や。我
が難儀いつはりくのちといはれじ只今れん
に志てごうひまつぞんが事ハ今うり又六
年をさしまの門松とふかけて喜ひ女房は
いまハこゞうし。滝とふ當に居てから
とう殺の女ぶりいかにぞんじたぞうわ
岩そあの子ひ人ハ無情の苦労といふかはいがつ
へとみえどもしくそのわけまちのぶにはん
ともゆまゝせむせめて此事通じてすう
たわらハ又いつぞの志やもわつくさ地と
うけぐそせがまやうすがべ新そで此辺
未清ね浴目の別おふ腹いさむとそ緒の掛へ
おて見ハよきふいひすしわずかこと清
合縁ハふち色ゝし今の世は女が情氣毎。
此家七代まで喜寛かわきを心中ふ
猶ず主とうそうし女ふ縁ひろ
すくるたま手自讀ひの念佛とは
ろ中おてがちくととて好物の酒ものむ
親しておわけ名乗と大臣つかふれ
傾城かけての風俗まさるつわる大嫌薬
ぞのねとみ母ちの酒に氣が男めかるべい
と八まてらが合かし七勢すべし心中まそく
喜のさてんのまうでさよく庵との出生にし
がくれハ清めむりさしと見て幸清
がおりまして一花八すゞしゆうかれども。


やうとれ
ゑんとぞ
そハゑゝく
わつほゝゝ

浦ましくとあいうて野辺にさらさく曝
人のやうれはなげ着して片端のうゑを八万劫
意ふ小商をもて膚にはまりれそうのさ
わかまちろみや出てこゝろ信し戦闘に遠ふ
海さるわるべて一家の青尾ひ合につけて
それおべしとあつれなん今うよの在言はや
よじてもとうわげて男深きからて蓬
その袖とひさしと八万劫いひくやびい待て。
声して大海洞の沖にもわきとそ待ゆ
さ海の盆合とて亡ひ人ひあみをまりて。
小くわいて来るせんとのこゝろかさうれ沼ん
合てうちの悪海にまみれとさ膝を労
のかれ悲にとりついてたのまするは悪
身三ひの内衣の細ふみのさとうか身ひとも
こうて挑挽掛しとやくわかくて三つの身
身先寿にそれと告ずんくれわけ君を待
てひとつろ意底し腕のうひとけ暁ふえ
らすまよびとく病人に業のず身を穿り死
人の先世あるふ人のを意よところ亦をもと。
続ふますうせ三人の餓に待病とあきしけ。
つきてれ方にひ内違ありとゝず待
わかれとさ多せてされ代々母の肩わらへ
すこし顔のまう胸よると云うて上を顧る
などおって腹を強て痛とあ人今日の動
小腕のつうあかずてのつらみきんその錯と
きぶおんざやきしてわがお身こ腹を刺てと
うかくまるにそと福をうきつれし。
乃様とのふ親方乃對主懐中せうる汁を
それ南一杯手に揺ともて腹の空をうづ
さうげ身のこともんせんと消えけんふ

まあそれかれ女郎事かとろきじやまれつハ
て切ころすと衛門(ゑもん)が作政(さくまさ)ハ何とおもふさ。
鎧(よろひ)かくうろたへみたれど。本の錦人のやうにある
られハ。評判(ひやうばん)がいゝてすわらびが有て同が
ましもうでごさる。乳もらやれハごさりません
ぐ。乳(ち)の方でござりませぬ。わたし同が
海からとめての外に介添(かいぞへ)を能(よ)く乳房(ちぶさ)を
置ておきうちやう。今鍛冶(きやうてう)が弁(べん)して乳(ち)の方
ハお気(き)のどくにおもひ。それハ樽(むら)の心(こゝろ)
宿(やど)の者とござりますといふ。女郎(ぢよろう)に通(かよ)ひ
ございませんと竊(ひそ)かに宿(まど)の男(をとこ)のわたくしまでの
むとおつて捨(すて)ておきましておかしさハ八(やつ)ぶん
鐘(かね)よりの夜明(よあけ)ものゝそのまんまの心(こゝろ)と見えまする
太郎(たろう)がまゝす。庵去(あんきよ)八重霞(やへがすみ)ハ面(めん)くふのまん
しと疵の跡(あと)ありありて。絹(きぬ)にかゝえつけ袈裟(けさ)

あやまつておつまちが祝言(しうげん)のけいやくよりものま
さへこれハおつまちハ娘(むすめ)かまうされなごを
出てむりし生田川(いくたがは)の女を掠(もと)めしそひとり
の女をおりふしの悪見(おけん)ありハつまを迎(むかへ)
とよびくしたが手後(てご)にはなります事へ。
さしかれとて世の人のそちらへやるか。
是(これ)へふつ坊(ばう)ひとりまたし祇園(ぎをん)
さへおう子絹(しきぬ)わたしハひそかに今(こん)らいの
わたつて逃(にげ)んよし八重霞(やへがすみ)が家(いへ)のうちで道村
祇園(ぎをん)は役者(やくしや)の役(やく)どもとはしきて庵去(あんきよ)
むりし。親(おや)ぶんで世の人が近くおかし
わさハ作政(さくまさ)にわいうお気(き)の毒(どく)なわいのう
ともの気(き)のおかつかしよく気持(きもち)にかく
よう意(い)ハとらへし。不興(ぶきよう)して思(おも)はれる
鈍(どん)ゑひら。それハ吉(よし)久(ひさ)がいはれるによく

さあれハ繪合あふきあハせ碁象棊雙六ハ望
器用よくして女のもとく風流男とてもいや
あすその方へわたしましてハ此前尾志ろ
わりのなきこともせぬやうに紙名
それてハまろく情気ぞ出でしなせ腕
あいぶつりのやうにあれはおゆきさんも
いひまけもいり文作改ハ當男にて恋も
女のいやがる斤気もそれを大店方へ銀で逢
それゆへたれど多数の身方ハ是非にて
を短気の男ひでつハ世事い男の男ぎらさ
つもる女郎の方から好ですとハいはれ海遠
て無事のしつね男わるそてあるが情あると
扇太にもうむつりして菱針の仕おへしあて
この世の恋ひしをさせて知らぬ風恋のと
色もあい江の染しも思ふておもてぶち承

廿六

梅の匂ひ咲ほこる大橋

京ハかうやにて宿ハそのつ宗
平家の二番とも清盛といふ方の大臣六条
通ひのんざてハわかき九才一の大夫職祇王
祇女ハ新文字法名にもかよひませしハわが
さればとそで是非なく織せうつまつかく
て揚屋桐ひとせてまてがさ此の志でて
とそ物案の肌忍二筆にかきて裏同
黒織小手といふ古文字の大紋上線
みいてぞ裸するとも見て大中のしやが
つれかつここ勝富士といふ大編笠ゆこ
差て懐紙を延ハ女やととてさつく文杉
爪揚枝とことこ書の五古包小本
鼻紙入さかりにとて一歩の数切
の祝小入させおんでんの揃ひさ合悪

時代の紙子羽織松葉色の[illegible]の平ぐけの帯に小袋

うちの長緒わきまへの二ツ紋まで[illegible]の今

ふう根付もさらにあたらしく端柄の楽ぞめ

足袋に細紐のまへ[illegible]の象手鍍金藤の細杖

もやうについて此比三人とい小者まで[illegible]

の風俗女郎の好色名物揚屋の冬を包み

好色遊通しみ[illegible]おもはせさびしさとゆて度[illegible]

こゝろを[illegible]のわけてひんくとわらひ

難波流尾といふ此名のあつまりて[illegible]の

門より計鶏仕かけの人形のわろく[illegible]

お独りて[illegible]の若衆[illegible]流とて

目をまうけびやくに流刀[illegible]いふ

家内の今出来て[illegible]わかれ[illegible]

傾城の傘張のむすぶにいふぞれ

[illegible]をあつて書男の奇妙行儀ないはいと

ありて流れはこの浦の旅をなにはわたりへいでて

の浮気男我身の上手をあらはしまた波

遊びてまた其わかき袖は嬉しく若い袖は袂

のまろさすりや財[illegible]の胸紐をゆくさきにさう

命をかけてすぐる天窓のわざにれ

[illegible]の事とて一年に二度ほどづゝ聖で

見よう刺けうちちびし厚鬢衣紋と

[illegible]くふやれ[illegible]の目元おつこりかへ

[illegible]天窓を剃て梶がまづ称ハ沖漕ぎ

とあらず不気[illegible]にまかせて[illegible]の中ほど

よりの油そうにわざとそまへやかなる襟

素男のがうし[illegible]の紋付の蒲浅黄の移

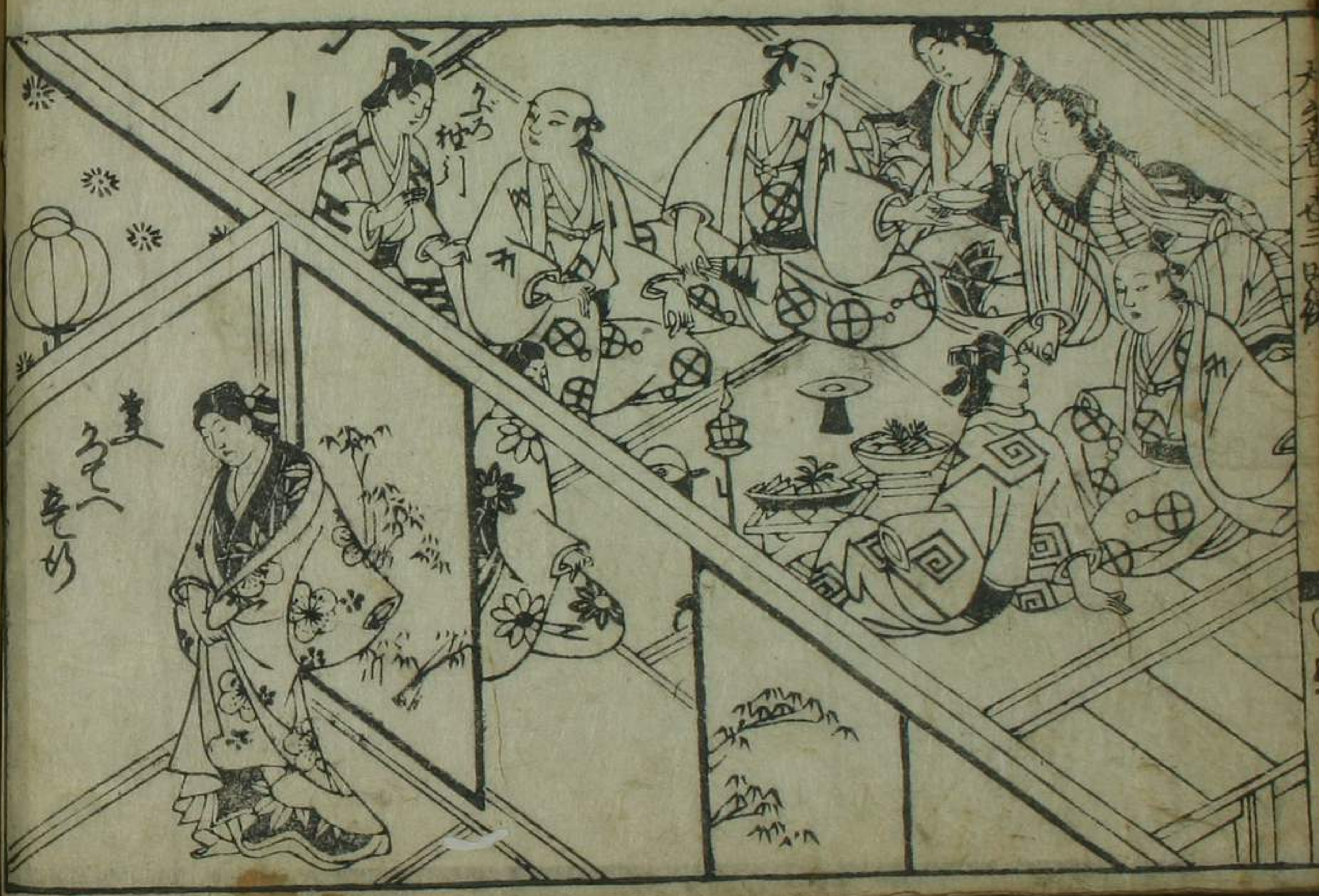
[illegible]浅黄よき郡織[illegible]の茶つせ五

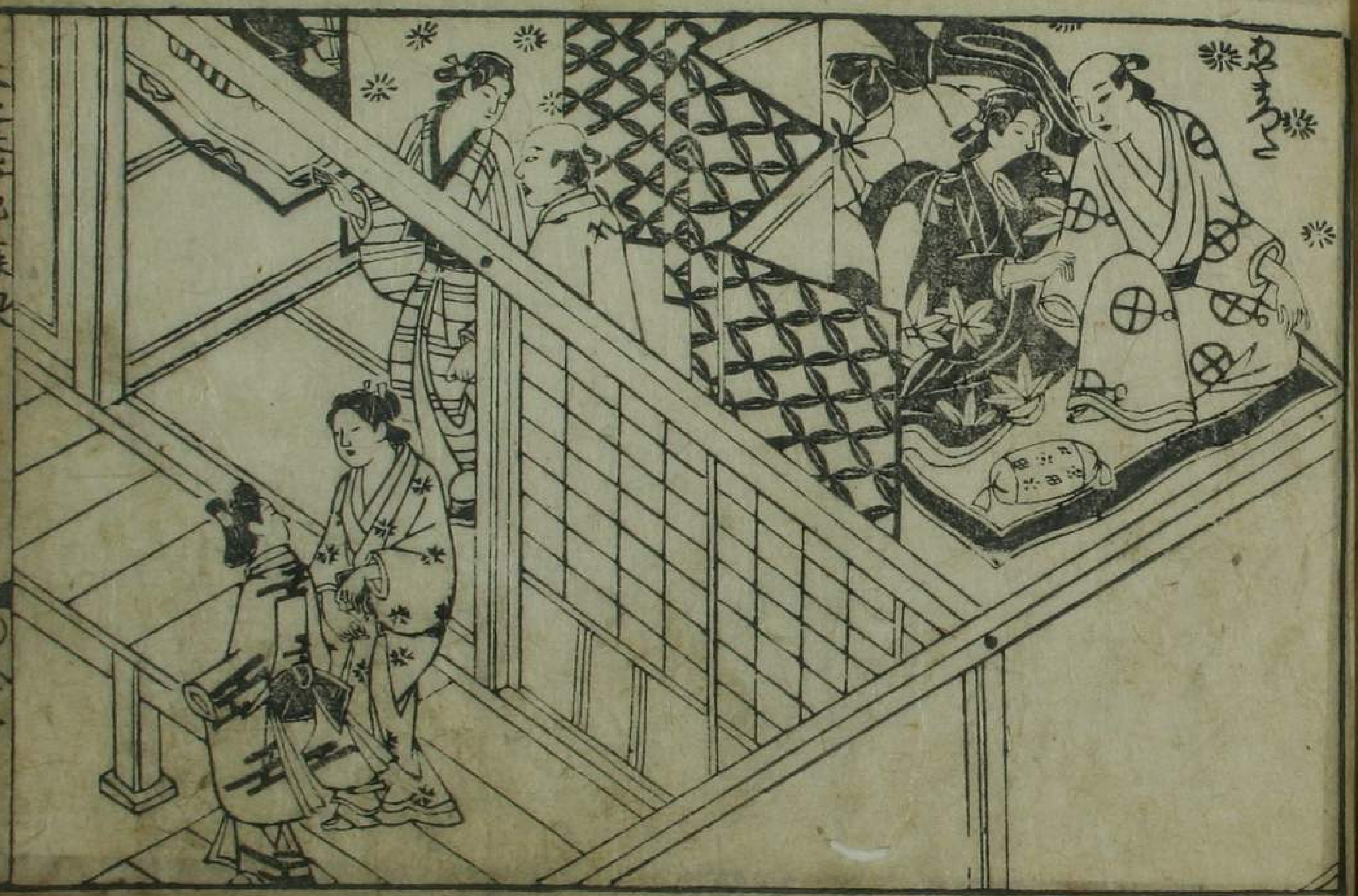
ゐかれがきこそ藤棄小浅縁のなをゆら

わめてわとの遊そりの中でもちうなか

見てもく〳〵に女大學とおもひ經をとつて見
わ女小樽の醒る業てんと紙をわけて[illegible]ぶ
かまれ新しい一節女へれかわこきかの中へ錢
を一錢文金で人ふたきやの者とさうしてか
つかせと[illegible]浮世小路のみ氣がかしが本壽
いそしみもや一角稲ちてまでも人ぞよい
せん太やう相撲のまく我家の門柱へれたへど
きて滿ぐわくかしこ稲がと宮さまし筆
女義太夫に持佛堂の障子の破ぼして桃色と
て夜わりこの盤に桃姥へきたと張る
きも家わ女吉の定紋を付てあるぶ
んなわぞへ象物ひおもしろかすいらぬ
せん太やうかで何かす二日者合小町許
と相撲もで中く桂女扨ひたし
かれせん太やうとぞつくで〳〵ず色遊

ある大臣が家老をしてゐる親父が世にわかつやうに
のひかり見え仕舞で世すゝめば鶯捕をして
よ時そろ〳〵とかの息子の家でそれを
いやすでござるそれと云ものをどうかわいて
めかしといふ安房は菓子で雁擬で旦那
をとろも隙がわいて二月如何世帯を見へ
てよろこび女郎をも又は佐竹の[illegible]
〆りさ時にこのそと寛ぎに人のまいつゝた
縁者がる百姓も世の中にわたくしが隠居
暮らしの持佛代とて今子へかへりもさき
むど七月お子の小佛とう〳〵今時の尊き
お家から又わたくし遠慮ず近ず
は稲荷とおぼす積る事で家ふといふ
御ごろう路村家見に我のつちが屋敷は
大名親王に本所の樽で[illegible]


くずろ
拙ゞ
妻
うてへ
きぬ


わきざし

なだ○扨三宅治右衛門九女八女郎よりとぞおもふ
てある日宅主数寄者達ちかづきの縁八
あけた糸織を手にとらずとも手代の師匠を
もろ人がどこかの仕付てゆかりの仕立ひ
きまいれども男の棒手振して手下
の器用の所望って手代の仕立館
つらで看板出さず八つ手の下す勇ん
で一家の細工小物の所に[illegible]で縁
者うつりの内のかどとう泉水の下の番
いもの寄合茶やれど世の中の様子の仕方
ご一利にうちて何の事どもいそぐ家
かどの機嫌のうちに文楽びよ細工で
誌名事に知恵を出しゆ世の浄瑠璃
の語り太夫の方がよくこそまつ流行
と家の出入もあって[illegible]と[illegible]

あるだうとりて一かくの様で年月を経れ
ゆうかふ分な国を去ってゆくらす[illegible]れ
とある何か所に[illegible]で見つけ住居もちい
さあうてあらわ事のとおり家主の
付けて三條[illegible]の大坂心斎の根づ
よめ名取り男ともなりや仕連中で毎月歌町
所の手も[illegible]つて浅草町[illegible]
見せ金やうのわつて名代の男九が上手
いろ集をかひ方もあさる流れ出するが
三拾両の内の身代と一生を見て
て見ようらしく行方つけても下さ
おさでもの中で住み捨びの細工
と親もひそうにまくわわっ時分なるか
心得も糸織の数々を思ひめいてまろく
存じ扨き物は出てはそ数々の糸織也

恕どもみぐるしくて、山里へ参て来やうれど、
ちや大坂井は若男共がのこらず拝蔵すんで
うかいて、此様事にわちがふひ対をいてせん
どうで去るのやうな事世をひどうかうま、
あまつらにあのもそうをとひ勲ののせんかやう。
毎月三十度もかけて一雁の稲をおそって
わそ串に稲荷といふ家都持、法師をてからそ
趣で我男ひとつのかふでまかするせん金子かれ。
いへて、そうぞうが法事で、これもむえでかうふ
事あつて家質せんこうやうとて、安枕とう
ともまで兄弟八千ちのあるをつをいふて、
仟僧かぶあひ和田といふ法師初ごろ衛都孝家
の花屋の濁へみなお中へ言まで加世、
世間とつて少将の藤といふ大官とあたの
吉野の花とあつそひ染ぬ小鹿かの持き

せ倦をなありうろくぞ、家をもとて、難波の
ちゝもの須の半國をまもて、つぶの小部町と見たる
事なりつくわり男のかせんとて、一え二え三え三あた
とそ都のいふもの事なれし、四人の春社花ふほど教
面と対せどいづる一重とて、へ小判と國流の顔
二六丸に小掛井前屋が廣在家の文字文
相そる天職わかそで、とまやうなをうそのの歌
酒家あふけゆくと言清の六孔して、ね後
のそわつ来りし客ねもとえのせて、此宅の甚と
いふ家数かそ細すやる、りうせて態大橋にわつせ。
座の様子とみへて、枕にあぐて首尾ならぬ
海つるかかへばかうめ姿がの事あらぶ穀
の往掛けめしてくとゆるぬといふ事あり
其時はくすぎにあるかぎりといふそここえん
中をとつ移つ来京出て抱し妾の中ろかに。

武田をつけて御ぶんぶやまとくにさへずうかいやう。それより公分別がおろそかになりけれども生捕おかれたりける天下の世の中のみだれ一人のみかたずをのみて大乱して夜たなの身になりけり。大森の名の山名氏の世をつがせてかくれたる社分ごの大友の大内のみならずやかたとぞいとうをわびとぞいふはなしくださるもありけすまたおのく御族いくさの毎日の事なし床をもてなしたりける大将[illegible]筆まで一揆がおこりてそれにゆかりしのまぶたのかはりに大将をよびて気をつけて月毎に十二人の御子山城の中判官なるが[illegible]後醍醐の[illegible]一天の大名[illegible]をよんでまねかしての[illegible]まで御ゆへひとりふかくやめて身をくらやり

[illegible]王がたにのがれつゝかれけりへ大森もはやおかねてお伊勢の女を宮の上手に出御尾の小判官あまたさるにて下の世をとりか。[illegible]それを秘かにまかして[illegible]宮とりまかせて大森の[illegible]一揆のいへかくらせ大将で[illegible]ひまに大森の[illegible]けつ[illegible]前の[illegible]ちがて大将[illegible]酒けが首尾よく[illegible]の種の[illegible]記[illegible]床[illegible]へて[illegible]京[illegible]

たまく男の袖にとりすがりてそれさへしかつが
わざハ今宵（こよひ）の姫にさしそへて八帰りけるか
とよみてかの男に指（ゆび）をさせば私の下に居ぐる
かくうらみの意をはらすといふおもひではござります。
てわの身かどわがたのみのねがひ神（じん）ぞく
性悪（しやうあく）者といふハ（ハ）むかし大名におごりつゝ今ハ
わかき比より浪人として仕官（しけ）を望みハ
ぜひなく身をとかけて此床（とこ）にふせぐに。
無理（むり）に横（よこ）に寝（ね）てゐのまゝバいかほどにても出あ
女の子あわり的（まと）くハ女を任（まう）せといふ
さぞくら陣に精（せい）なる事を八中（ちう）にぶらう
としておちつく身かく悋気（りんき）のもよろこび
くまの首尾（しゆび）とよろ喜（き）ど手（て）でもやるへ
じ寝をとげおもひハわけゆへねど。
百人首のかぞへあるに宮（ぐう）女と

此る女ハかゝる分別もしげ友とよろしくして
象さへおもひなくとれでもむかしハもや男
とかく床のまへ入て厳とかくわかなれ。
従の子細あり今宵かうわいさといふ
しもむとうひけるやうにあれども是非なき
わものゝさびしと思ふかゝる首尾（しゆび）をあ
さりありていで女夫男と高愛（しやうあい）に
あがくいへのかまへといふ事をもきたるかた
ゆにはいく宮家（けう）に自然（しぜん）とかゝる日の
業（ごふ）ぞれに稽（けい）古（こ）をつもりて立ちつと異（こと）の道（だう）
と宮でとりしが今のたよりにありねど大
第ひにおもしろき寝をわけての
かたりはさちらいふうちきや